

市原市^こ小^{とり}鳥^{むかい}向遺跡

2000

医療法人 白 百 合 会
財団法人 市原市文化財センター

序 文

千葉県市原市は東京湾に面した房総半島のほぼ中央に位置し、市北に村田川、南に養老川が支流を取り込んで東京湾に流れ込み、南に水源である丘陵地帯構え、中央に中小河川の開析による小支谷が網の目に巡り、北に台地を取り巻く様に沖積平野が広がる、変化に富んだ自然環境に恵まれた地であり、古来より多くの人々が生活を営んできました。私たちは市内に残る数多くの遺跡により、その足跡を垣間見ることができます。

一方、市原市は首都圏に近接するところから、交通網の整備、住宅建設など開発行為が日々行われております。このようなことは、より良い暮らしを望む現代に生きる我々にとって、不可欠な事象であります。ところがこうした中、気づかぬ内に、足下に広がる我々の祖先が残してきた重要な文化遺産が破壊される恐れも十分にあります。経済不況の中、開発と文化財保護との調和を図りつつ、これら文化遺産を後世に伝える努力もまた不可欠であると考えます。

この度、ここに報告する「小鳥向遺跡」は社会福祉施設建設に先立ち、造成と埋蔵文化財保護との調整に基づき、関係諸機関の御協力を頂いて発掘調査を実施した遺跡であり、本報告書はその調査成果をまとめたものであります。広く文化財に対する啓蒙と普及に活用されることを願うものであります。

最後に、報告書の刊行にあたり、ご指導、ご協力を賜りました文化庁記念物課・千葉県教育庁文化課・ならびに関係諸機関に対し、心から謝意を申し上げる次第であります。

平成12年3月

財団法人 市原市文化財センター
理事長 小茶文夫

例 言

1. 本書は、医療法人白百合会の委託により、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもとに、財団法人市原市文化財センターが実施した、小鳥向遺跡の報告書である。
2. 遺跡名については調査時には、依頼名である新堀小鳥向遺跡としたが、報告書刊行に当たり、『千葉県市原市埋蔵文化財分布図－北部編－』の登録名に従い小鳥向遺跡とする。
3. センター調査コードはセ293である。
4. 発掘調査及び整理作業の概要は、下記のとおりである。

所在地 市原市新堀字馬場947-3の一部 調査面積230㎡
本調査 平成11年5月10日～平成11年5月24日 担当 北見一弘
整理作業 平成11年6月1日～平成11年9月30日 担当 北見一弘
5. 本書の執筆は、北見一弘が担当した。
6. 本書に使用した地形図は、市原市発行の1：25,000地形図及び1：2,500地形図である。
7. 調査区の設定は、公共座標による。
8. 本書を作成するにあたり、鑄造関連遺物の分類、測定及び整理方法については穴澤義功氏のご教示、ご協力を賜った。厚く御礼申し上げます。

凡 例

1. 実測図の縮尺は、遺構は1/40、土器は1/3を基本としたが、遺構の規模、遺物の大きさによって、適宜縮尺を変えているので、スケールに従って頂きたい。
2. 全体図・遺構図における方位は、座標北である。
3. 実測図中のスクリーントーン使用部位の説明は、なるべく、図中、若しくは観察表に対応する記載をしているので参照して頂きたい。
4. 石器・鉄器等の計量遺物の重量測定には、エー・アンド・ディ社製パーソナル電子天秤 EW-300Gを使用した。
5. 土器観察表の色調は新版標準土色帖に準拠した記載をしている。
6. 磁着度については標準磁石によって、メタル度については埋蔵文化財用特殊金属探知器 MR-50Bを使用した。

第1表 遺構番号対象表

旧遺構番号	掲載遺構番号
007	1号遺構
003	2号遺構
001	3号遺構
014	4号遺構
011	5号遺構
002	6号遺構
004	7号遺構
006	8号遺構

旧遺構番号	掲載遺構番号
005	9号遺構
008	10号遺構
009	11号遺構
010	12号遺構
013	13号遺構
Pit. 44	14号遺構
012	欠番

本文目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 序説	1
第2章 調査成果	3
第3章 小結	18

挿図目次

第1図 小鳥向遺跡及び周辺の主な遺跡	1
第2図 小鳥向遺跡周辺地形	2
第3図 確認調査及び本調査範囲	2
第4図 小鳥向遺跡全体図	4
第5図 1号・2号遺構実測図	6
第6図 2号遺構出土遺物実測図	7
第7図 3号遺構及び出土遺物実測図	8
第8図 4号・5号遺構及び出土遺物実測図	9
第9図 6・7・8・9号遺構及び出土遺物実測図	10
第10図 10・11・12・13・14号遺構及び出土遺物実測図	12
第11図 Pit 24出土遺物実測図	13
第12図 鋳造関連遺物実測図(1)	16
第13図 鋳造関連遺物実測図(2)	17

表目次

第1表 遺構番号対照表	
第2表 Pit 計測表	13
第3表 遺構別鋳造関連遺物出土量一覧表	15
第4表 出土土器観察表	21
第5表 鋳造関連遺物観察	21

図版目次

図版1 遺構写真	図版4 遺物写真
図版2 遺構写真	図版5～13 鋳造関連遺物
図版3 遺構写真	

第1章 序 説

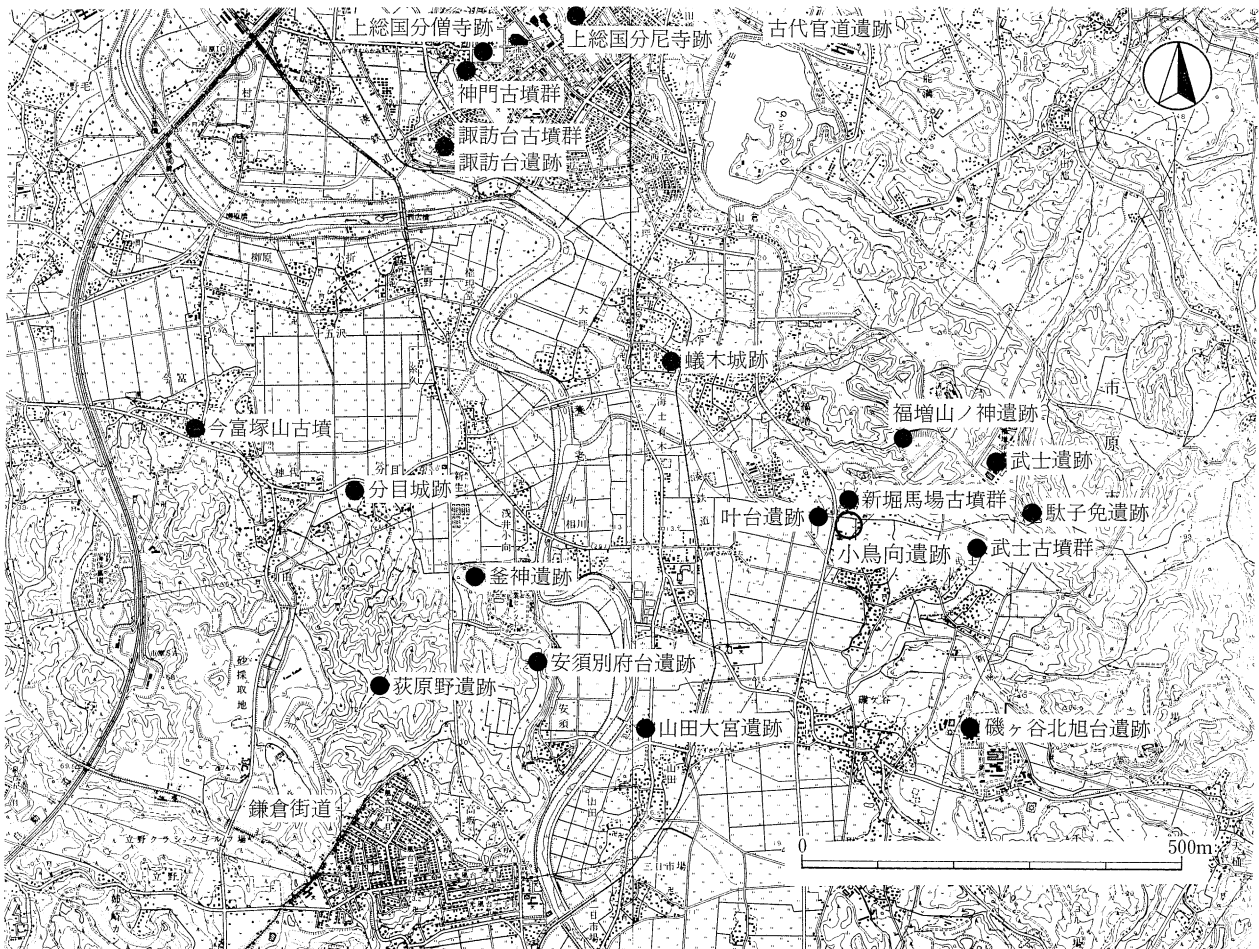
第1節 調査に至る経緯

小鳥向遺跡は、医療法人白百合会による社会福祉施設建設に先行して、平成10年度市内遺跡発掘調査事業・新堀小鳥向遺跡として、対象面積1,023.8㎡のうち103㎡の確認調査が実施された。その成果を受け、この内の230㎡について記録保存の必要性が生じたため、本調査を実施するに至った。

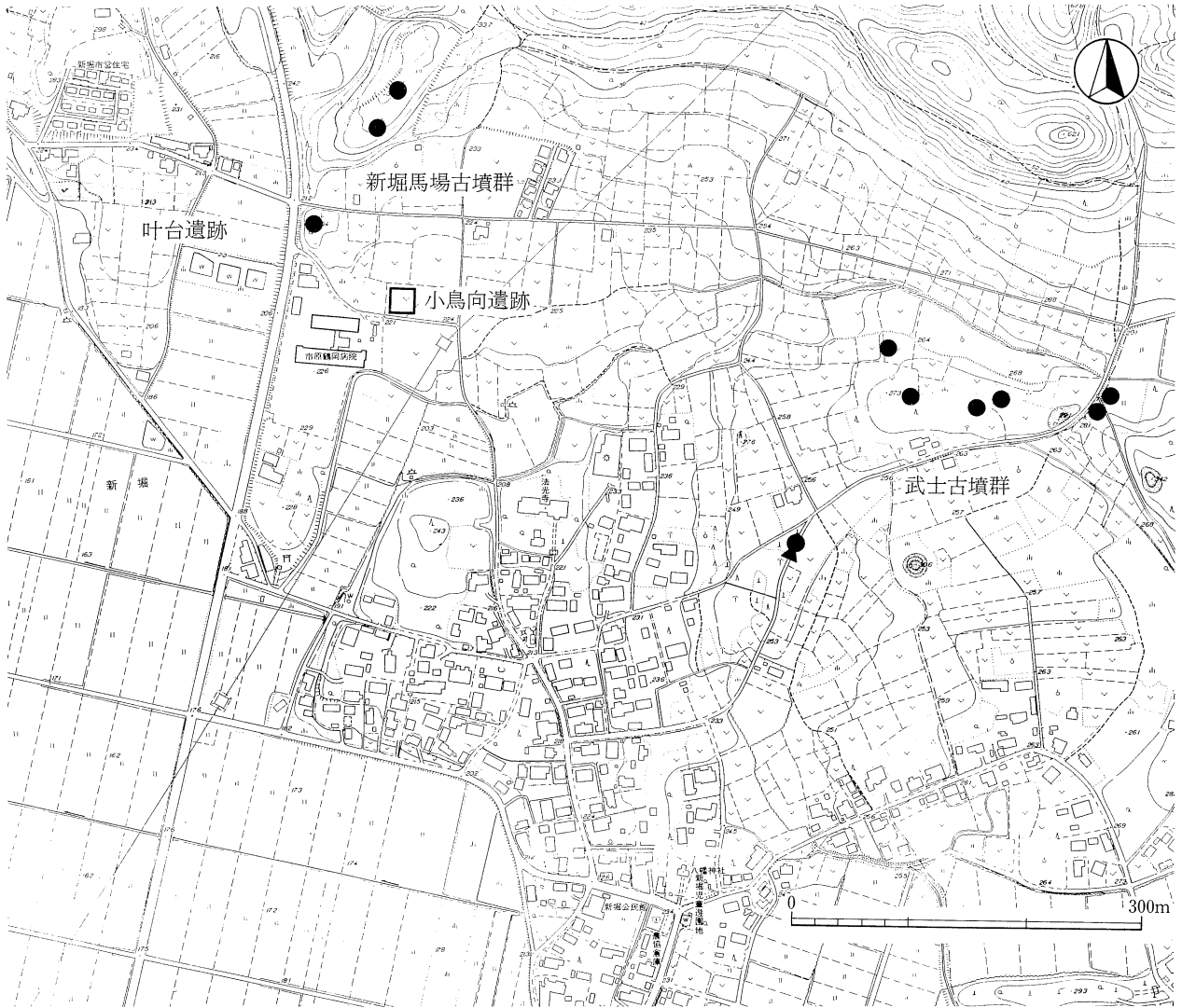
第2節 遺跡の位置と環境

遺跡は、養老川下流域右岸の標高22mの河岸段丘上に位置する。現在、遺跡の立地する河岸段丘は、現水田面から約2mの比高差を持つ微高地を形成する。南西1.5kmを養老川が北上し、支流である新堀川が南1kmを西に流れる。北は国分寺台遺跡群に繋がる標高55～60mを測る洪積台地が樹枝状に開析された小谷を抱えて展開する。

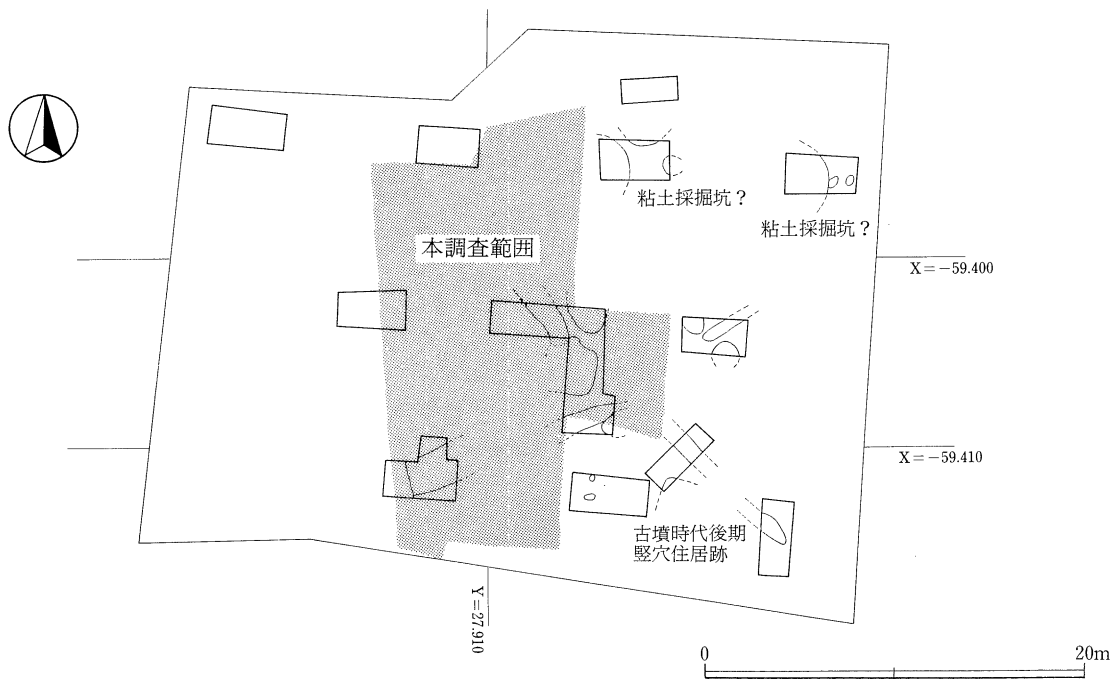
小鳥向遺跡に近接した調査事例としては、幅90m前後の浅い谷を隔てた西方の微高地状に叶台遺跡が位置する(大村 1992)。1,700㎡の調査で弥生時代宮ノ台期から古墳時代後期初頭を中心とした竪穴住居跡69軒、古墳時代後期初頭の掘立柱建物1棟が検出され、これまで事例が皆無であった養老川



第1図 小鳥向遺跡及び周辺の主な遺跡



第2図 小鳥向遺跡周辺地形



第3図 確認調査及び本調査範囲

下流域の微高地における集落の動向を示す資料を提示している。南西2kmの養老川現流路に隣接した河岸段丘上状には山田大宮遺跡が位置し、弥生時代中期宮ノ台期の方形周溝墓が6基検出されている(米田 1986)。墓域は更に周辺部広がり、集落も隣接する可能性が指摘されている。南方1.4kmの台地上には北旭台遺跡が位置し、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡16軒、古墳時代後期竪穴住居跡1軒、方形周溝墓、方墳が検出されている。北方0.6kmの台地上には弥生時代後期・古墳時代後期の竪穴住居、奈良・平安時代の土坑墓、いわゆる方形周溝遺構が検出された福増山ノ神遺跡がある。対岸である養老川左岸の台地上には、袖ヶ浦市新田より繋がるとされる鎌倉街道推定ルートがあり、台地北辺には分目要害城跡をはじめとして城郭跡とされる遺跡が点在する。

第2章 調査成果

第1節 調査方法

調査は平成10年度の確認調査の成果を請け、230㎡を対象として行われた。重機により表土を除去した後、遺跡近隣の基準点を基にして、公共座標を用い、方眼杭を設定し、20m×20mの大グリッドを基準として調査を進めた。遺構番号は、遺構を確認した順に001から付与した。遺構図面は方眼杭を基準に、1/20を基本に、1/10、1/40の縮尺で作成した。なお、本報告における遺構番号は、整理作業時に付け替えているので対照表を参照されたい(表1)。

第2節 遺跡の概要

遺 構 調査の結果、検出された遺構は、古墳時代前期初頭の方形周溝墓1基、奈良・平安時代竪穴住居跡1軒、中世土坑10基、火葬施設1基、溝状遺構1状である。

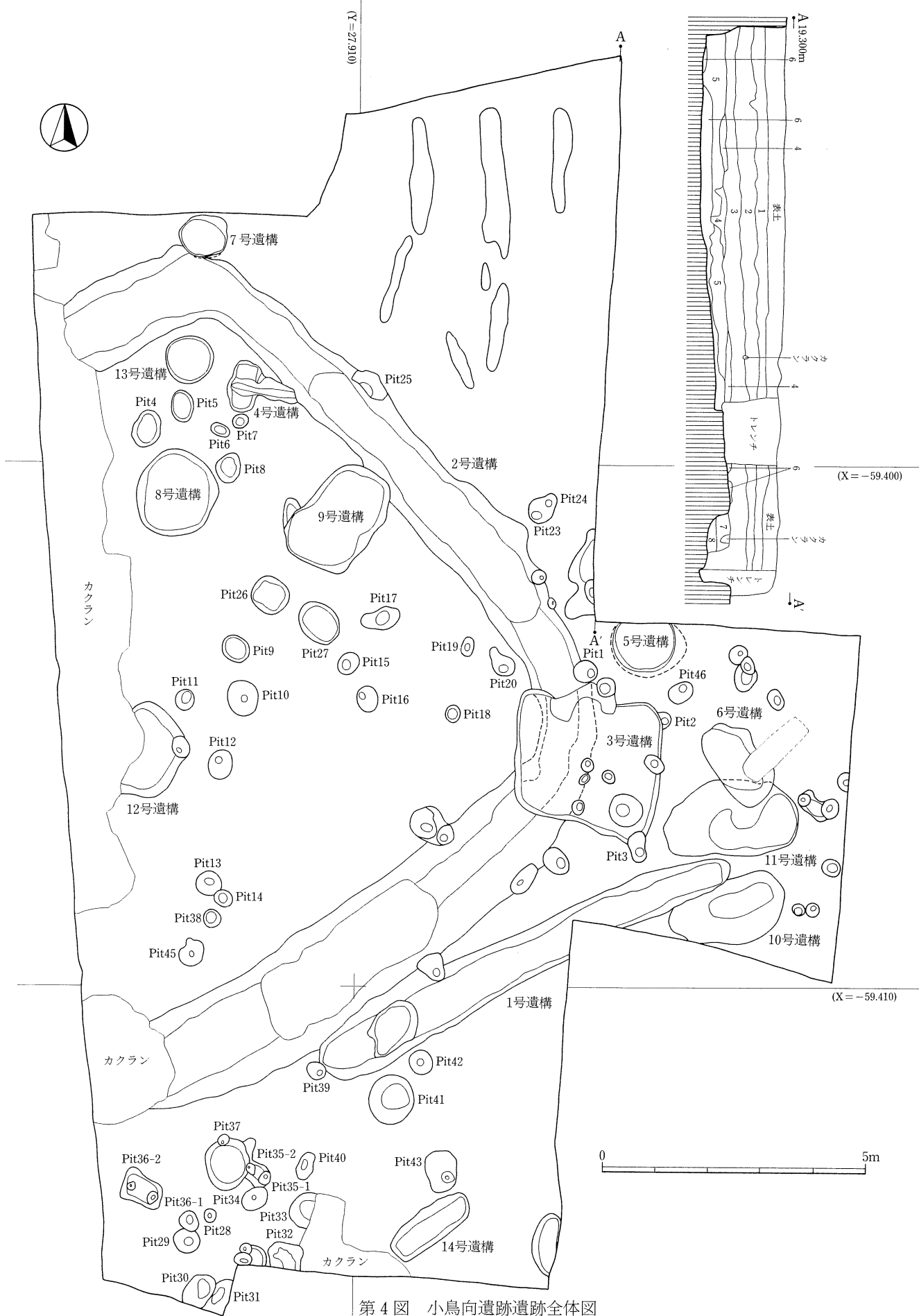
基本層序(第4図) 次に挙げるとおりであるが、叶台遺跡の上層で認められた直径2～5cmの円礫を多量に含む層に相当する土層は、当遺跡では認められない。また、その他の土層についてもその様相は異なる。この差異をどのように関連づけるのか、今後の問題として残る。周辺の調査成果に期待すると共に、意識的な調査が望まれる。

1層は、褐色土で、1～3mmのローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む、2層は、褐色土で、やや灰色がかかる褐色で、焼土粒、炭化物粒を多く含み、締まっている、3層は、褐色土で、1～3mmのローム粒、焼土粒、炭化物粒を多く含み、鉾滓も散見される、4層は、にぶい黄橙色土で、浅黄橙色砂質土を含む、粘性は強く、堅緻である、5層は、暗褐色土で焼土粒を少量含む、6層は、にぶい褐色土で、浅黄橙色砂質土をしみ状に含む、7層は、褐色土で、1～3mmのローム粒を多く含む、8層は、褐色土で、ローム粒、焼土粒を多く含む。

第3節 遺構と遺物

1号遺構(第5図)

遺 構 溝状遺構である。西側で2号遺構と重複する。本遺構が古い。確認調査で、南側に直角方向に伸びる溝状遺構1条が検出されており、本遺構の延長と考えると、方形周溝墓の可能性もある。規模は長さ8.7m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。**出土遺物** 覆土中より混入とみられる土師器小片が



第4図 小鳥向遺跡遺跡全体図

少量出土したのみである。土層 1層は、暗褐色土で、ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む、2層は、暗褐色土で、焼土粒、炭化物粒を多く含む、やや締まる、3層は、褐色土で、1～3mmのローム粒、炭化物粒を多く含む、4層は、にぶい黄橙色土で、ローム粒を多く含む、5層は、暗褐色土で焼土粒を少量含む、6層は、褐色土で、浅黄橙色砂質土をしみ状に含む、7層は、暗黄褐色土で、ローム粒を多く含む、8層は、暗黄褐色土で、ソフトロームがしみ状を呈する、9層は、暗黄褐色土で、ローム粒多く含む、やや締まる、10層は、明黄褐色土で、ソフトロームがしみ状を呈する、11層は明黄褐色土。

2号遺構 (第5・6図)

遺構 方形周溝墓である。南側で1号遺構と重複する。本遺構が新しい。西側の周溝が近年の攪乱を受け、遺構の遺存度は、全体の2/3程である。北側に下がる緩斜面に位置するため、周溝底は北側が南側に比べて高く、20cmの比高差を持つ。周溝は、中央でその幅と深さが最大になる形態を呈する。規模は北西から南東方向の遺構外周で14.1m、内側で10.8mを測る。周溝は、遺存度の高い南辺で幅1.7～2.0m、深さ0.53～0.80mを測る。主体部、周溝内土坑は認められない。

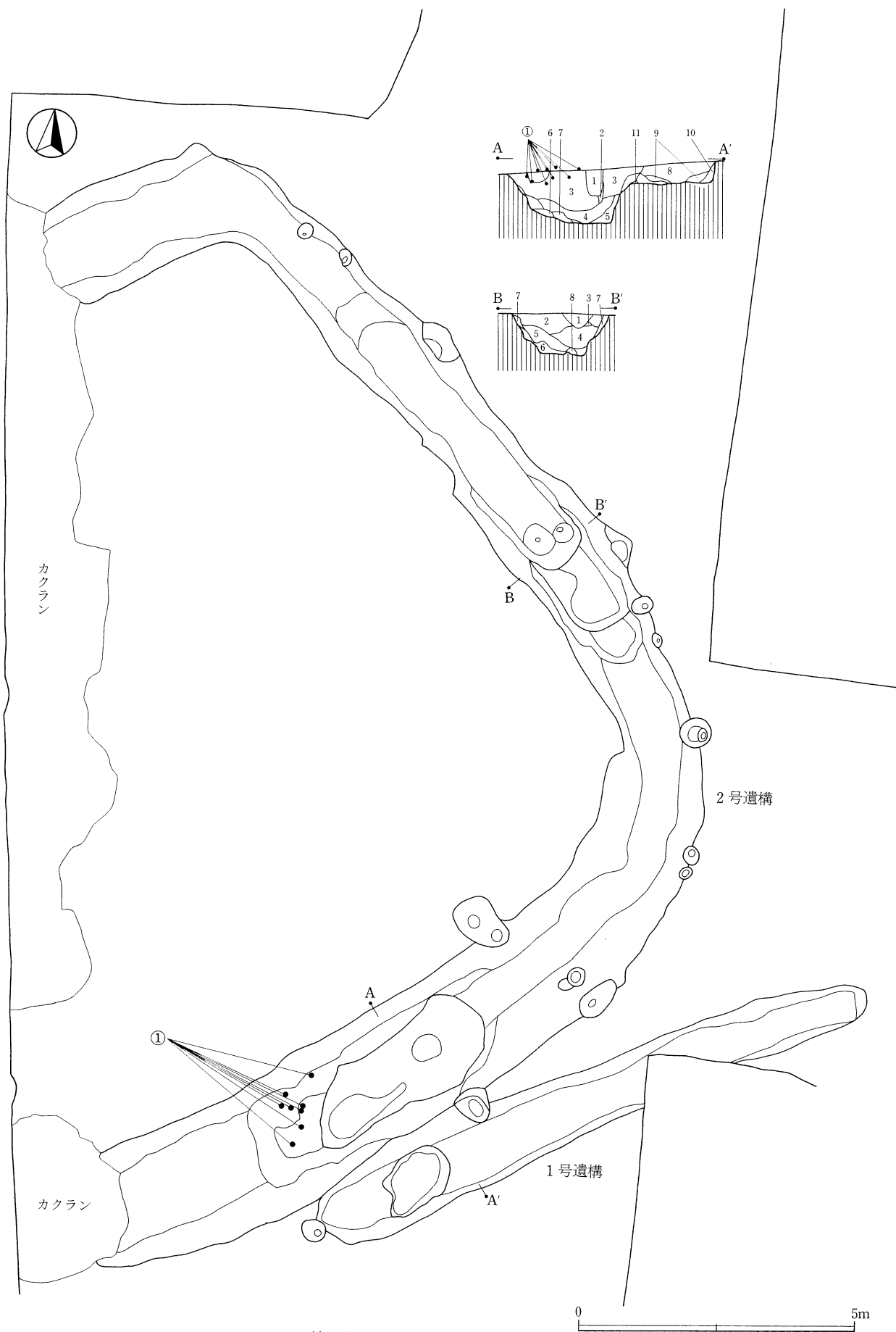
出土遺物 ①は南側の周溝での上層から出土している。②・③・④は覆土中の出土で、流れ込みによる混入とみられる。⑤は砥石片である。

3号遺構 (第7図)

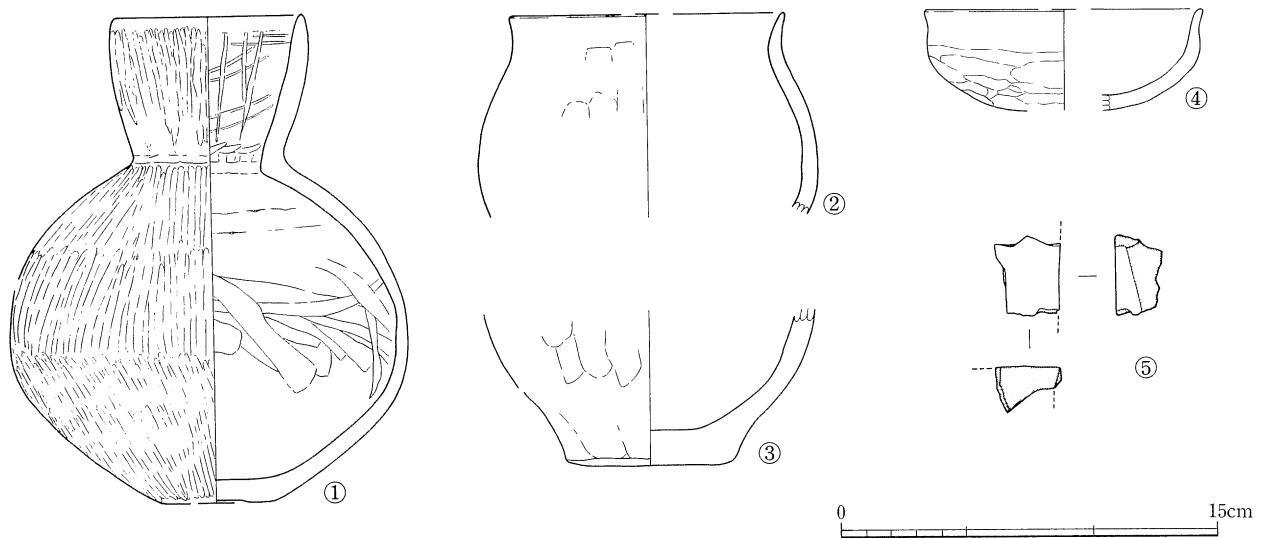
遺構 竪穴住居である。平面形体は歪んだ方形を呈し、2.48m×2.78mの規模を測る。主軸方位はN-5°-E。壁の立ち上がりは緩やかで確認面から床面まで6cm～17cmを測る。支柱穴、周溝は確認できない。床面は中央部を中心に良く踏み締められている。住居北壁にはカマドが設置されているが、東側の袖部、火床面は遺存しない。煙道は不明瞭であるが20cmを測る。西側袖部から住居中央寄りに焼土がまとまって検出されており、燃焼部のかき出しを想定し得る。P.1は出入り口ピットで26cm、P.2はいわゆる貯蔵穴であり、40cmを測る。遺物 ②は底部に墨書が認められるが、字形は不明である。④・⑤長頸瓶で、同一個体と見られる。⑦は5号遺構とした中世の土坑の覆土上層から出土しており、同一個体と見られる破片が本遺構覆土中より出土しているため、3号遺構に帰属するものと見られる。⑧は粘土塊を焼成しており、4面が遺存するが、本来6面を有する長方体若しくは四角錐状の形状を成すものと見られる。二次的な被熱は明瞭には確認できないが、カマド脇からの出土でもあり、支脚と考えられる。土層 1. 黒褐色土で、1～3mmのローム粒多く、炭化物少量含む、2. 黒褐色土で、焼土粒、砂質粘土多く含む、3. 褐色土で、ソフトロームがしみ状を呈する、4. にぶい橙色土で、焼土粒多く含む、5. 褐色土で、粘質土を微量含む、6. 黒褐色土で、炭化物粒、焼土粒多く含む。

4号遺構 (第8図)

遺構 火葬施設と見られる。長方形の土坑と、その長辺を中央から切るかたちで溝状に堀込みが入る。1号遺構の調査により、溝状の堀込みは、端部が失われている。土坑部の規模は長径100cm×短径50cm、深さ8cm～12cmを測る。溝状の堀込みは、遺存長135cm×幅15cm～36cm、深さ34cmを測り、土坑を切り込む西側が深く、東側に向かって浅くなる形状を呈する。土坑部の覆土中には小さな骨片、焼土、炭化物が混入する。堀込みでは、土坑部と重複する部分に土坑の覆土と同様な状態が見られるが、張り出した部分の覆土中には、骨片、焼土、炭化物はほとんど認められない。全体的に焼土量は



第5図 1号・2号遺構実測図



第6図 2号遺構出土遺物実測図

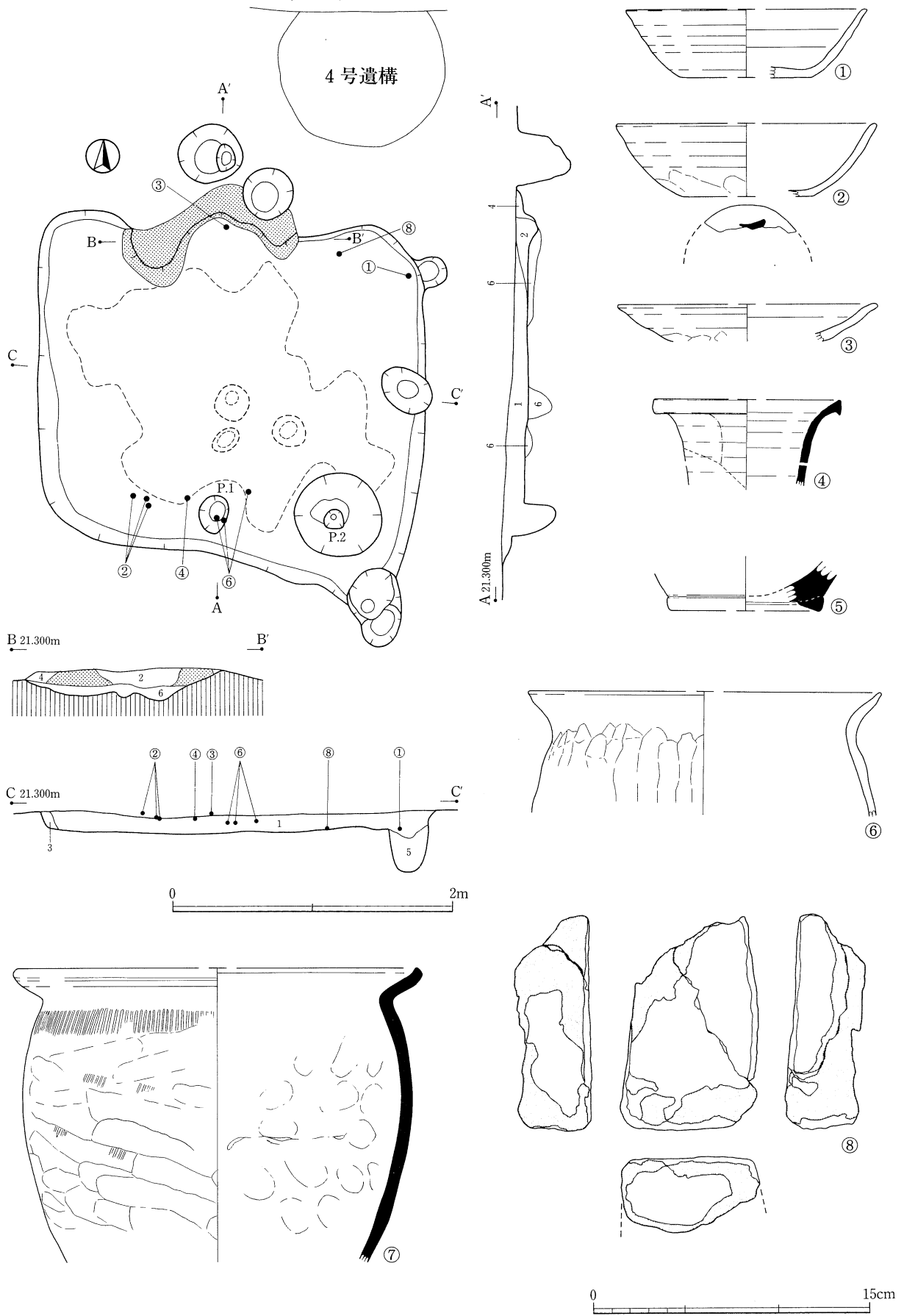
少なく、遺構底面、側面にも被熱を示す明瞭な部位は認められない。遺物 時期を確定する遺物は皆無である。土坑の南側底部からは、直径5cm程の炭化材が5本、人骨と思われる骨片を伴って出土した。炭化材は樹種の不明なものが大半だが、溝状の堀込みから出土した物の中に、1片のみ竹が認められる。炭化材は、ほぼ長辺を南北方向にして間隔を置いて出土しており、棒状の材が長軸方向に沿って、堀込みを跨ぎ、若干の間隔を持って並べられていたと考えられる。骨片は、炭化材よりも上位に集中して出土している。いずれも小片であり、被熱による結果か、半円状の割れ目が認められ、やや灰色がかかる白色を呈する。

5号遺構 (第8図)

遺 構 平面形態は、一部が調査区境界にかかるが、円形を呈すると思われる。ほぼ垂直に近い角度で掘り込まれているが、下位において外側に、最大で20cm程張り出す。底はやや粘性のある浅黄色の砂質土で、中央を最深部をして外周に向け浅くなる形状を呈する。遺構底では水がしみ出る。規模は、直径が確認面において1.21m、下位では、1.45m、深さは、0.91mを測る。土層は、覆土上層と、中位以下では、様相が異なる。中位以下では、明瞭に、細かく分層可能な土層が、レンズ状に堆積しており、いわゆる自然堆積を示すと考えられる。対して上層では、一様な土が堆積しており、下層よりも急激な堆積状況を示すと考えられる。この中には中位以下には認められない焼土粒や炭化物、鋳造関連遺物が含まれる。尚、最上位は、確認調査時のサブレンチの設定により、土層断面の観察は不可能になったが、ここからも鋳造関連遺物の出土が認められる。遺物 出土遺物は少量である。掲載遺物は全て遺構下位からの出土である。②は常滑甕の小片で、③は焼成されているが、形態は不明。一面が遺存し、ヘラナデが施されている。胎土にスサと見られる植物の繊維痕が密に認められる。

6号遺構 (第9図)

遺 構 土坑である。11号遺構と重複する。本遺構が新しい。遺構が暗褐色の有機質土中で完結しており、西側においてプランが不明瞭となるが、平面形態は不整長楕円形を呈すると思われる。規模は1.68m×0.89m、深さは7cm～14cmを測る。ほぼ中央にピットが位置する。径30cm×25cm、土坑底からの深さ21cmを測る。遺物 ①は瀬戸美濃系四耳壺である。土層 1層は、黒褐色土で、

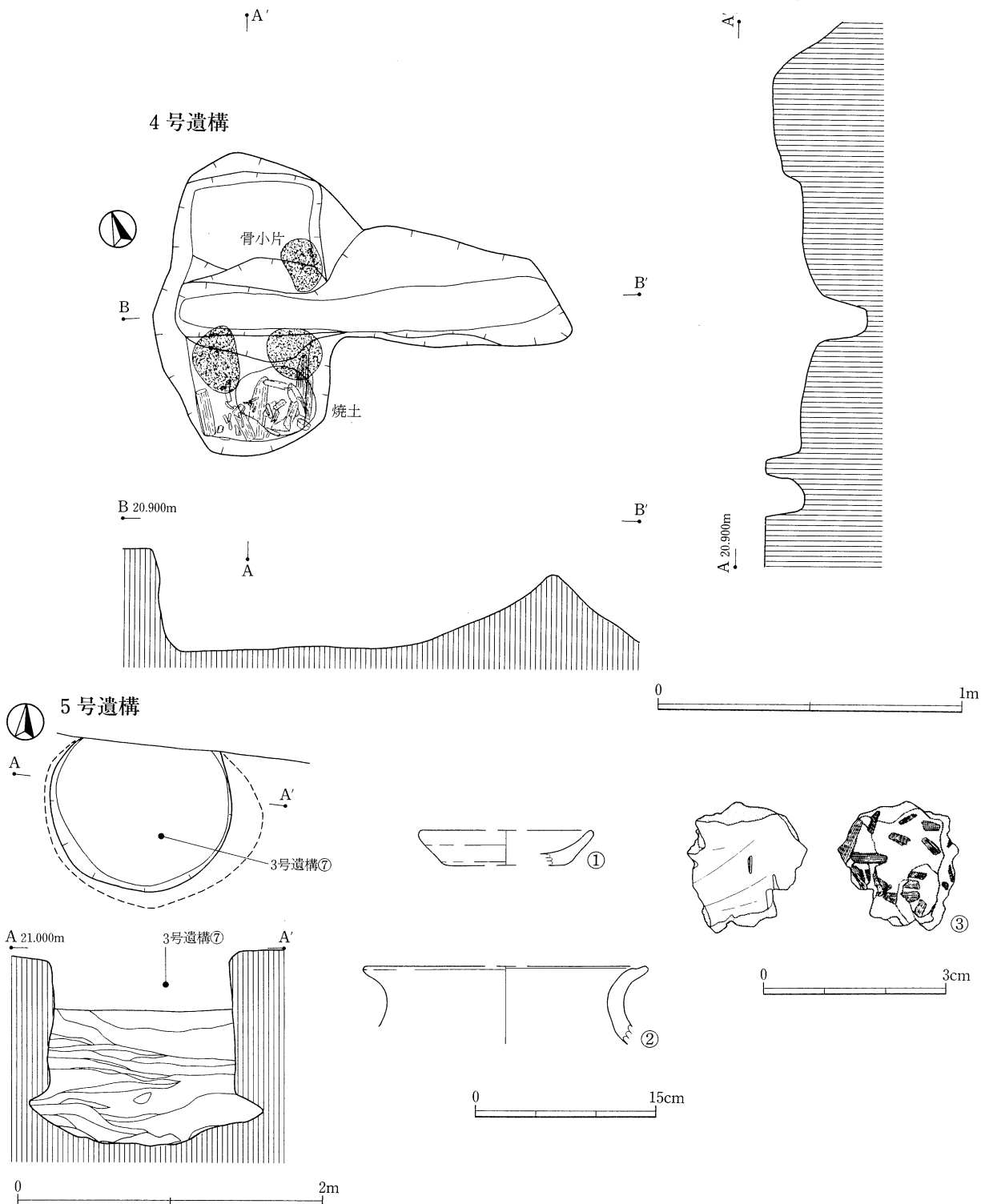


第7図 3号遺構及び出土遺物実測図

ローム粒多量に、焼土粒、炭化物少量含む、2層は暗褐色土で、ローム粒少量含む、3層は、暗黄褐色土で、ソフトロームがしみ状を呈する。4層は、暗褐色土で、ローム粒少量含む。2・4層は11号遺構覆土。

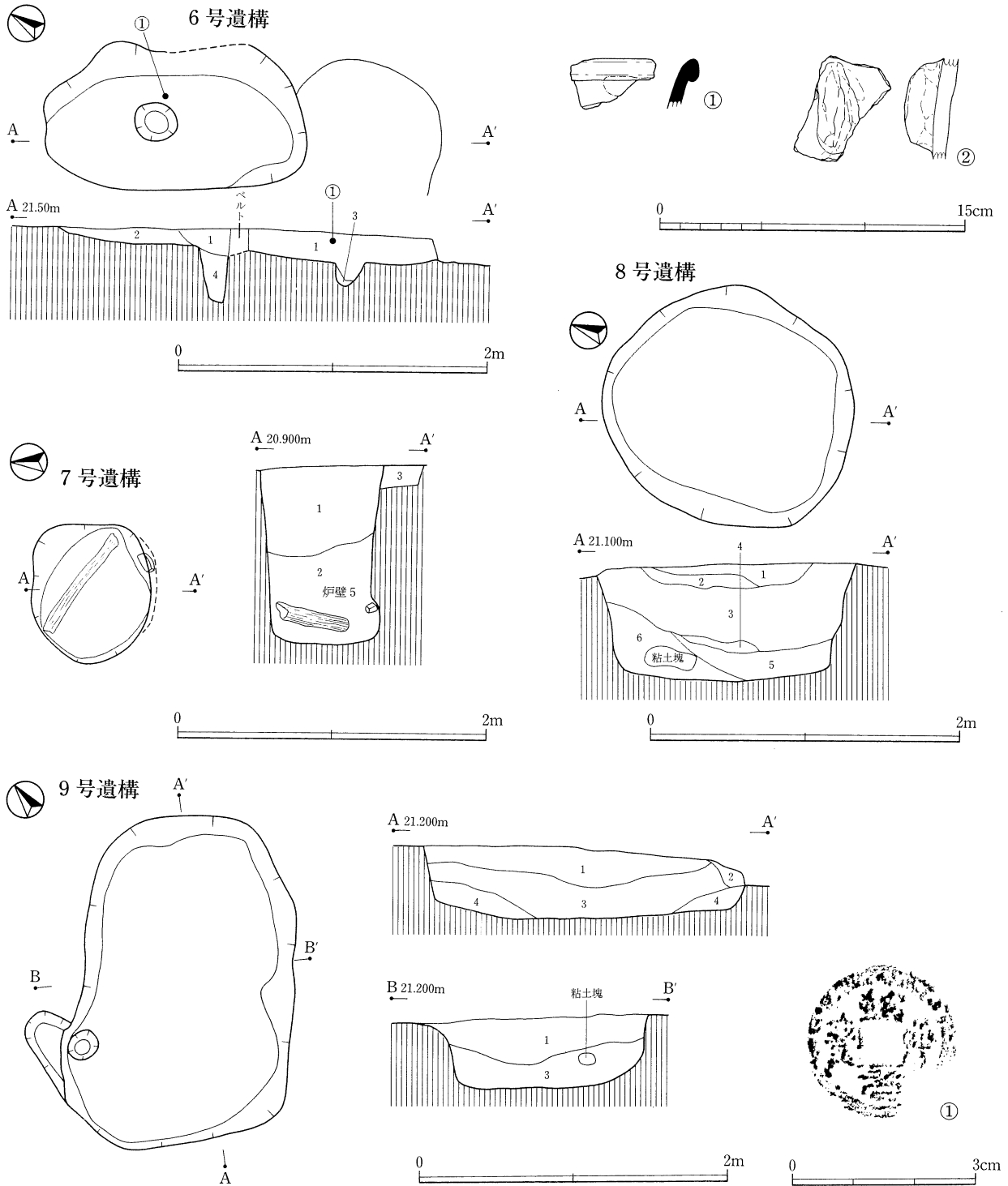
7号遺構 (第9図)

遺構 土坑である。平面形態は、不整楕円形を呈する。遺構はほぼ垂直に掘り込まれ、下位にお



第8図 4号・5号遺構及び出土遺物実測図

いて南西方向のみ、外側に張り出す。底部の形態はほとんど平坦であり、土質は、やや粘性のある浅黄色の砂質土で、水がしみ出す。規模は0.93m×0.78m、深さは1.15mを測る。土層はほとんど同様な土質で、急激な堆積状況を示す。遺物 下層より木が出土している。長さ88cm、直径14.8cmを測り、表皮は遺存しないが、明瞭な加工痕は認められない。同レベルから溶解炉の炉床部片が出土している。土層 1層は、黒褐色土で、焼土粒、炭化物粒を多く含む、2層は、黒褐色土で、砂質土



第9図 6・7・8・9号遺構及び出土遺物実測図

が多く混入する、炭化物が認められる、3層は、暗褐色土で、ローム粒少量含む。2号遺構周溝覆土。

8号遺構 (第9図)

遺 構 土坑である。平面形態は、楕円形を呈するが、南側の下端ラインは直線的である。底面は平坦である。長径1.63m×短径1.50m、深さ0.6m～0.7mを測る。 **土 層** 1層は、黒褐色土で、ローム粒、焼土粒を多く含む、2層は、黒褐色土で、焼土粒を含む、3層は、褐色土で1～10mmのローム粒、炭化物を多く含む、粘質土粒、焼土粒を少量含む、4層は、粘土塊、5層は、ローム粒、焼土粒、粘質土粒を多く含む、6層は、ローム粒、炭化物、焼土粒、を含み、粘質土粒を多く含む。

9号遺構 (第9図)

遺 構 土坑である。平面形態は長方形を呈する。西側でやや張り出す部位は別遺構。底面は平坦である。長径2.17m×短径1.38m、深さ0.14m～0.4mを測る。側面に接して、長径0.2m×短径0.18m、底面からの深さ17cmのピットが認められるが、性格は不明。 **遺 物** ①は覆土上層からの出土。治平元宝で初鑄年は1194年である。 **土 層** 1層は、黒褐色土で、炭化物、焼土粒を多く含む、2層は、黒褐色土で、炭化物、焼土粒多く含む、やや締まる、3層は、黒褐色土で、10～20mmのローム粒、炭化物、焼土粒を多く含む、4層は暗黒褐色土で炭化物、焼土粒を多く含む。

10号遺構 (第10図)

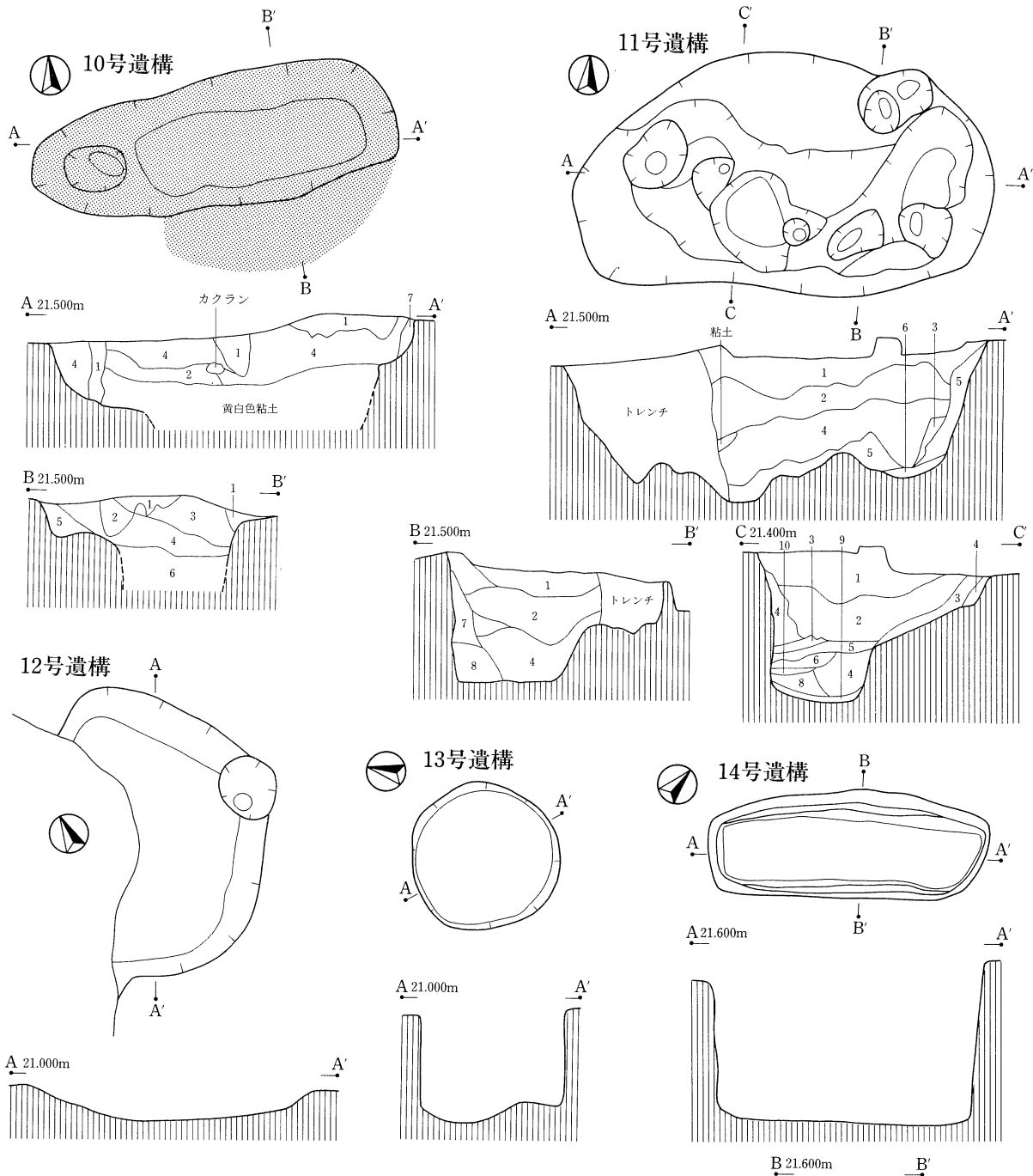
遺 構 1号遺構と重複する。本遺構が新しい。長径2.28m×短径1.26mの長楕円形を呈し、その周囲を暗褐色土が巡る形で認められた。覆土は、粘性の強い砂質土が主体をなし、下層では混じりの無い粘土である。ローム層を掘り抜いて、下層の粘質土にまで至っており、覆土と地山の判別が出来ず、遺構底面は確認できなかった。土層からは自然堆積とする根拠がなく、粘土を充填している可能性が考えられる。 **遺 物** 皆無である。 **土 層** 1層は、黒褐色土で、粘性の強い砂質土が混じる、2層は、にぶい黄橙色土で、褐色の砂質土に黄橙色の砂質土が混じる、3層は、にぶい黄橙色土主体で、良くしまっている、5層は、黒褐色土で、1号遺構の覆土。6層は、にぶい黄橙色土で、砂質土が多く含まれる。7層は、黄褐色土で、ソフトロームがしみ状に含まれる。

11号遺構 (第10図)

遺 構 土坑である。9号遺構の北側に隣接する。確認面における平面形態は楕円形を呈するが、底面においては不整形である。加えて、底面は平坦ではなく、幾つものピットが認められる。長径2.61m×短径1.47m、深さ50cm～79cmを測る。 **遺 物** 皆無である。 **土 層** 1層は、暗褐色土で、ローム粒少量含む、2層は、暗褐色土で、焼土粒、炭化物少量含む、3層は、浅黄橙色土で、ソフトロームが主体、4層は、暗黄褐色土で、ローム粒多く含む、締まる、5層は、浅黄橙色土で、ロームブロックが混じり、やや締まる、6層は、明黄褐色土で、ソフトロームがしみ状を呈する、7層は、暗褐色土で、ローム粒多く含む、8層は黄褐色土で、ロームブロック少量含む、9層は、明黄褐色土で、ローム粒多く含む。

12号遺構 (第10図)

遺 構 土坑である。調査区西南側に位置する。西側で近年の攪乱を受け、遺存度は2/3程である。平面形態は方形を呈するとみられる。底面は平坦であり、締まりは強くない。東側の隅に42cm×34cm深さ20cmのピットが認められるが性格は不明。規模は長径1.63m×短径1.37m、深さ7cm～12cmを測る。 **遺 物** 土師器の小片と鑄造関連遺物が出土している。



第10図 10・11・12・13・14号遺構及び出土遺物実測図

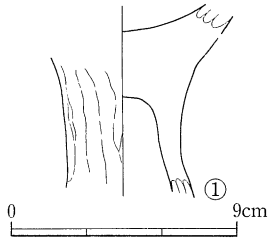
13号遺構 (第10図)

遺 構 土坑である。6号遺構の北側に位置する。平面形態は、円形を呈する。底面は平坦である。規模は直径0.93m、深さ54cm~62cmを測る。 **遺 物** 皆無である。

14号遺構 (第10図)

遺 構 土坑である。調査区南側に位置する。平面形態は長方形を呈する。規模は1.72m×0.67、深さ0.95を測る。覆土は一様に締まっている。 **遺 物** 皆無である。

その他の遺構



第11図 Pit24出土遺物実測図

小鳥向遺跡では、前記の遺構の他、調査区北側の斜面部に南北方向に伸びる長軸50～250cm、幅16～40cm、深さ2～4cm程の溝状遺構が検出されているが、性格、時期等不明である。また、建物跡としては復元不可能なピットが多数検出され、覆土の色調や、出土遺物として鑄造関連遺物が認められるピットが検出されている。ほぼ同時期の遺構と考えられる。また、鑄造関連遺物の出土する遺構からは、同様なピット群が鑄造遺構周辺に検出される事例が少なから

ず認められるが、性格付けには言及できない。以下にその計測値を示す。

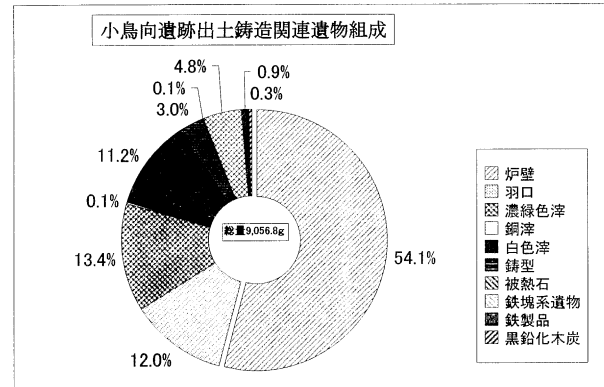
第2表 Pit 計測表

遺構番号	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	底部標高(m)	遺構番号	長軸長(cm)	短軸長(cm)	深さ(cm)	底部標高(m)
Pit. 1	49	43	39	20.779	Pit. 25	—	—	32	20.68
Pit. 2	23	—	10	21.128	Pit. 26	67	—	38	20.723
Pit. 3	42	30	67	20.66	Pit. 27	86	68	42	20.928
Pit. 4	71	54	13	20.785	Pit. 28	38	33	18	19.968
Pit. 5	59	41	9	20.829	Pit. 29	50	46	28	19.866
Pit. 6	36	22	13	20.831	Pit. 30	48	—	25	19.895
Pit. 7	32	26	36	20.614	Pit. 31	66	27	34	19.83
Pit. 8	56	46	11	20.876	Pit. 32	57	—	35	20.001
Pit. 9	54	47	9	20.881	Pit. 33	68	—	25	20.069
Pit. 10	69	61	24	20.755	Pit. 34	55	49	31	19.918
Pit. 11	38	35	15	20.81	Pit. 35-1	27	21	33	19.908
Pit. 12	55	47	32	20.661	Pit. 35-2	25	19	29	19.924
Pit. 13	52	46	23	20.704	Pit. 36-1	30	22	33	19.929
Pit. 14	35	32	15	20.817	Pit. 36-2	20	17	46	19.792
Pit. 15	46	36	29	20.723	Pit. 37	98	—	35	19.859
Pit. 16	50	40	30	20.75	Pit. 38	34	32	12	20.85
Pit. 17	76	—	64	20.487	Pit. 39	38	32	19	20.039
Pit. 18	32	30	10	21.015	Pit. 40	53	28	31	19.985
Pit. 19	34	26	38	20.595	Pit. 41	94	83	35	20.028
Pit. 20	39	31	51	20.497	Pit. 42	47	44	52	19.868
Pit. 21	—	—	—	—	Pit. 43	80	58	20	20.229
Pit. 22	—	—	—	—	Pit. 45	52	41	19	20.765
Pit. 23	42	33	18	20.923	Pit. 46	49	38	56	20.644
Pit. 24	32	31	63	20.453					

第4節 鑄造関連遺物

鑄造関連遺物の分類（第12・13図）

小鳥向遺跡では、鑄造関連遺物は計9,056.8gが出土した。これを炉壁、羽口、濃緑色滓、銅滓、白色滓、鑄型、被熱石、鉄滓、鉄塊系遺物、黒鉛化木炭に分類して計量し、各遺構ごとの組成を見ることを狙いとした。しかし、重量比でを手がかりとするには、遺物の総量が少なく、各遺構の



機能に言及するには、資料不足は否めず、ましてや小鳥向遺跡全体の傾向を表すには至らないと思われる。しかし、遺構毎の出土割合を、遺構間、もしくは、他遺跡の事例との比較することにより、遺構の性格をある程度表す事が可能と考える。以下、分類に従って、その概要を示すと共に、各遺構について、若干の検討を加えたい。尚、各分類の代表的な遺物107点を抽出して図化し、寸法・重量・磁着度・メタル度を計測した。その他の遺物については分類後、計量したに留まる。

炉壁（1～25） 全て溶解炉の破片であると考えられる。溶解した付着物の状態を基準とすることで、溶解炉のどの部位の破片であるか分類することが可能とされるが、総体量が少ないことから、細分による性格付けには誤認を生じやすいと考え、重量比には反映させていない。

炉壁は内面に溶解物の付着の有無で大別出来る。前者は細分可能である。溶解物が厚く付着し、表面に気泡が多く認められるものは、炉底部、若しくは「ル」の部分破片とみられ、溶解物が、流動状を示す破片は溶解炉の「こしき」にあたりとみられる。これらの中で、断面に、溶解物が複数層認められ、いわゆる「溶解炉の修復・再利用」を示すとされる破片も少数存在する。「上こしき」にあたる遺物は確認していない。後者のものも含め、粘土部分が還元したものと、酸化したものが認められるが、いずれも外面が遺存するものは皆無で、全て剥離している。胎土中には植物繊維痕、靨痕が認められる。

炉壁は、鑄造関連遺物として分類した中で54.1%を占める。遺構別の出土量は、8号遺構で、炉壁総量の23.9%、7号遺構で21.3%を示し、他遺構は10%以下である。各遺構における鑄造関連遺物中の炉壁が占める割合は、7号遺構で90%を示し、特徴的な在り方を示す。

羽口（26～37） 小破片のみで、形状・口径が復元可能な個体は皆無である。鑄造、鍛造の分類も実施していない。胎土は溶解炉と判別不可能なほど極似しているが、外面に付着物が認められるものが多い。

羽口は、鑄造関連遺物の中で、12.0%の割合を示す。遺構別の出土量は、どの遺構も10%に満たない。各遺構における鑄造関連遺物中の羽口が占める割合は、10%未満である。

濃緑色滓（38～41） いわゆる鑄造滓に含まれる。この滓が、鉄・銅いずれの溶解時に生成されるのか不明である。肉眼観察では、ガラス質で、流動状を示すもの、気泡が混じり、やや面が粗いものが身と盛られる。この差異が何を起因とするのか、鉄・銅の問題も含め、検討が必要である。

濃緑色滓は、鑄造関連遺物の中で、13.4%の割合を示す。遺構別の出土量は、8号遺構で24.8%、9号遺構で12.7%以外は5%以下である。各遺構における鑄造関連遺物中の濃緑色滓が占める割合は、

第3表 鑄造関連遺物出土遺構表

掲載遺構番号	遺構番号	炉壁	羽口	濃綠色滓	銅滓	白色滓	鑄型	被熱石	鉄塊系遺物	鉄製品	黒鉛化木炭	遺構別重量
1号遺構	007	55.1	25.1									80.2
2号遺構	003	228.8	150.6	107.1	11.3	106.8	19.3		19.4	7.1	1.9	652.1
3号遺構	001	82.6	99.4	118.4		43.5	14.5	11	40.8	5.7	12	427.9
4号遺構	014	97	63.9	6.7		19.2			28.7			215.5
5号遺構	011	69.1		33			67.3		16.8			186.2
6号遺構	002	94.2	14.2	10.2		30.6	38.5		2.3	2.6		192.6
7号遺構	004	1090.8	49	44.4		20.4			8			1212.6
8号遺構	006	1225.3	125	283.8		163.8	27.8		118.9	36.3		1980.9
9号遺構	005	367.5	29.5	145.7		113	48.2		7.3	9.3	2.7	723.2
Pit. 1	Pit. 1	25.7		8.2		8.2			2.2			44.3
Pit. 2	Pit. 2								1.2			1.2
Pit. 3	Pit. 3	31.2	7.1			4.2						42.5
Pit. 12	Pit. 12		14.7									14.7
Pit. 13	Pit. 13	78.1	15.5	5.2		17.6	2.3					118.7
Pit. 17	Pit. 17	284.5	57.3	109.6		105.8	4		2		3.2	566.4
Pit. 19	Pit. 19	68.6	7.5			45.7						121.8
Pit. 20	Pit. 20	63.7	83	23.4		46.1			4.2	10.6	3.4	234.4
Pit. 21	Pit. 21	90.8	47.8	15.6		70.3	5		3.9		4.3	237.7
Pit. 22	Pit. 22	40.1	35.4	13.2								88.7
Pit. 23	Pit. 23			6.7		24.5						31.2
Pit. 25	Pit. 25	62.4	6.7	32.9		35.7	5		18.1			160.8
Pit. 26	Pit. 26	82.5	26.2	27.1		39.5			18.8			194.1
Pit. 28	Pit. 28	12.7										12.7
Pit. 30	Pit. 30	6.2		2								8.2
Pit. 32	Pit. 32	18.6							7.7			26.3
Pit. 33	Pit. 33	44.8	30	18.8					9.9			103.5
Pit. 36	Pit. 36		11.9	22.7		2.9			16.4			53.9
Pit. 37	Pit. 37	47.7	8.8	15.2		1.8			11.3	9.1		93.9
Pit. 39	Pit. 39	82.4	74.9	11.8		12.1	25.2		21.1			227.5
Pit. 41	Pit. 41	124.6	41.9	20.7		9.4			29.9		2.3	228.8
Pit. 42	Pit. 42	104.5		12.3		17.4			7			141.2
Pit. 46	Pit. 46	8.1		12.2		6.5						26.8
Pit. 47	Pit. 47	33		39.6		8.5			11.6			92.7
	IV層一括	510.6										510.6
	全体一括										3	3
	遺物別重量	4620.6	1025.4	1146.5	11.3	953.3	257.1	11	407.5	80.7	29.8	9056.8

9号遺構で20%を示すのを筆頭に、平均的に含まれている。

白色滓 (43～57) 鑄造滓に含まれると考えられる。形状は流動状を呈し、小片が多い。微細な気泡が密にみられ、比重は軽い。色調は白色若しくは灰色がかっている。

白色滓は鑄造関連遺物の中で、11.2%の割合を示す。遺構別での出土割合は、8号遺構で17.2%、9号遺構で、11.9%の他は5%以下である。各遺構における白色滓の占める割合は、6号・9号遺構で16%弱である他はばらつきが見られるが、濃綠色滓を多く含んだ5号遺構では皆無である。

白色滓は、銅滓・銅製品の鑄型との出土位置の重複から、銅の溶解に関係するという指摘があるが、データ不足から、その追加資料とはなり得ない。有機的に関係するのか不明であるが、数字の上では、濃綠色滓の出土量には比例しないようである。

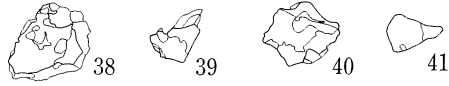
鑄型 (58～62) 鑄型の出土数は僅かで、全体に占める割合は3.0%に留まる。いずれも小片で、どのような製品を鑄型か判断出来ない。比較的遺存状態の良い鑄型として、5号遺構から出土した61がある。鑄型面が滑らかで凹凸が無いことから中子と見られ、中子の何れの部位になるか不明であるため、確証はないが、内径が26.8～37.6cmの製品を鑄込んだ可能性を指摘できる。これ以外の鑄型も含めて、鑄型面は還元しており、黄色がかかったオリーブ色である。胎土は炉壁よりも細粒で構成されるが、矽痕、植物繊維痕が認められる個体もある。

銅滓 42の1点のみ確認している。全体に細かい気泡が見られ、元々の表面は遺存しないと思われる。比重は軽い。色調は黒色を基調とし、部分的に暗赤褐色部位が認められる。断面に微少な緑青



第12图 铸造関連遺物実測图 (1)

濃綠色滓



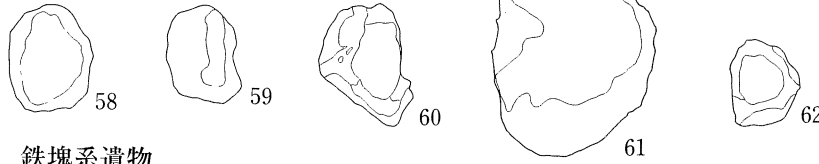
銅滓



白色滓



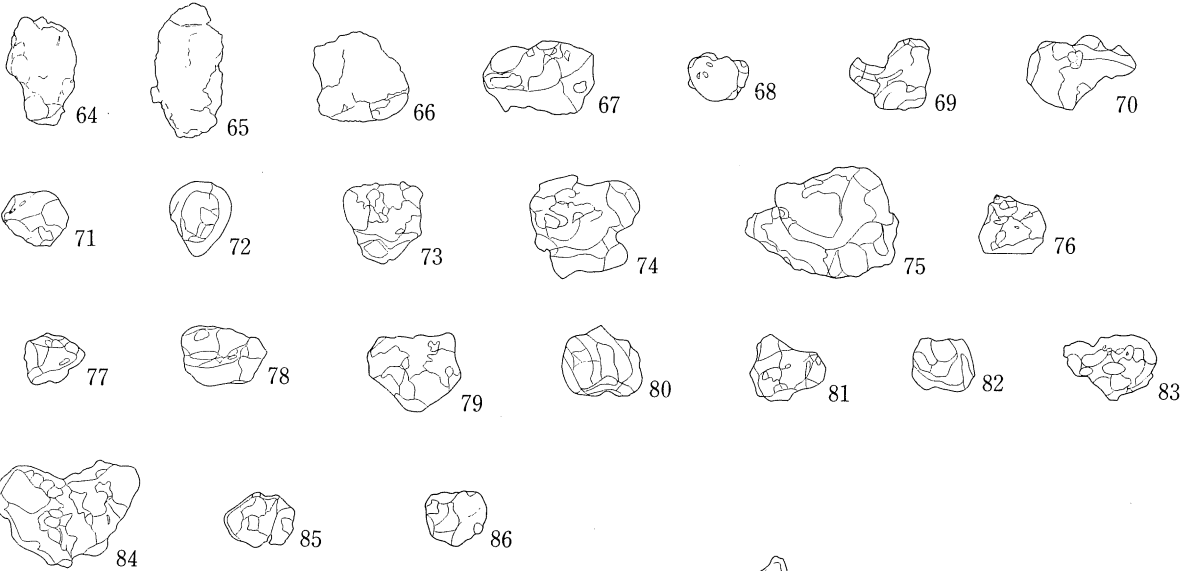
鑄型



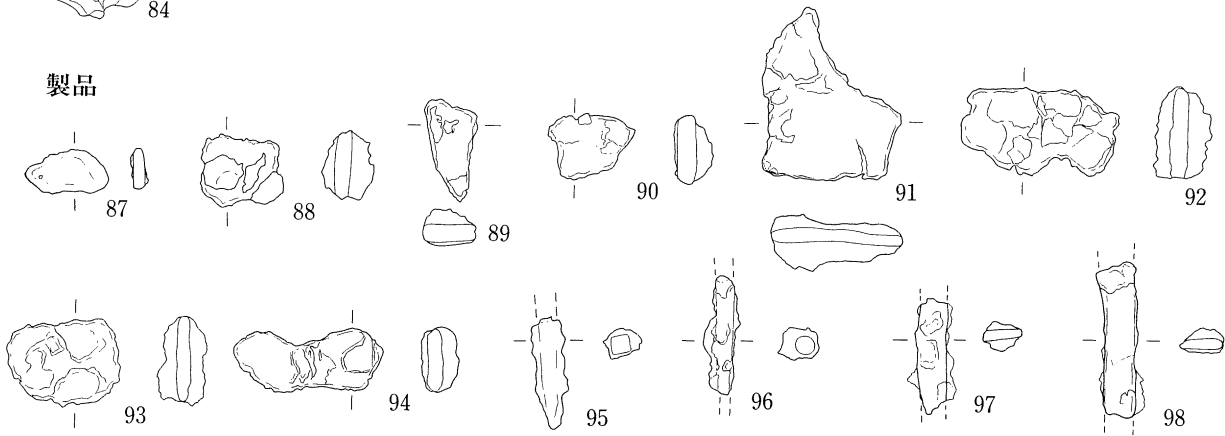
被熱石



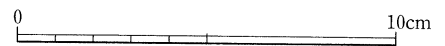
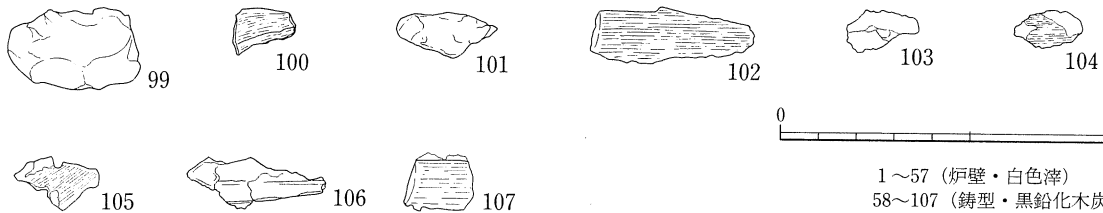
鉄塊系遺物



製品



黒鉛化木炭



1~57 (炉壁・白色滓) S=1/4
58~107 (鑄型・黒鉛化木炭) S=1/2

第13図 鑄造関連遺物実測図(2)

が認められ、銅の細片が混入していると思われる。

被熱石 63の1点が出土している。3号遺構覆土中からの出土であるが、流れ込みの遺物と思われる。石材は不明。

鉄塊系遺物 (64～86) 出土総量の29.2%が8号遺構からの出土である。この分類には製品は含まれない。酸化が激しく、本来の形状は不明である。この鉄塊の性格については、鑄込みの際に溢れたもの、原材料として持ち込まれたものが想定出来るが、判断材料に乏しい。

製品 (87～98) この分類では鑄造品だけでなく、鍛造の鉄製品も含まれる。鑄造品は板状を呈する。鉄鍋等の容器類の可能性もあるが、特徴的な形状を示すものがなく、確証は得られない。鍛造品は断面形が円形、方形を呈する棒状製品と、刀子の茎に形状が似ている製品が出土している。

黒鉛化木炭 (99～107) 出土量は、鑄造関連遺物総量の0.3%に過ぎない。黒鉛化木炭とは、燃焼中に溶解炉内で、木炭に鉄が置換して生成されるもので、鑄造遺跡や、鑄造遺構の指標になるとされている。近年の調査により、溶解炉の燃料として炭が使用されたことが明らかになりつつあり、この遺物が出土したことは、この件に関する追加資料となる。

第3章 小 結

遺 構

小鳥向遺跡では古墳時代前期、奈良・平安時代、中世の遺構が検出された。

古墳時代前期の方形周溝墓については、叶台遺跡との関連も考えられるが、この時期の方形周溝墓のあり方として、居住域と墓域の未分化の傾向が認められることを考えると、当調査区周辺の河岸段丘上にも集落が展開する可能性がある。

奈良・平安時代の竪穴住居については、支柱穴の認められない、小規模のものであり、散在的なあり方を示すと考えられる。出土土器から、9世紀前半の様相であると見られる。

中世の遺構であるが、土坑や、いわゆるT字型火葬墓、ピット群が認められる。土坑については、隅丸長方形を呈するもの、小規模な井戸状遺構、不整楕円形を呈するものがあり、また、時期は不明であるが、10号遺構のような、粘土が充填されたような状況を示す遺構も認められる。これらは、覆土内に鑄造関連遺物を含むか否かで時期的な大別が可能である。5号、6号遺構は12世紀後半の時期が与えられる遺物が出土しており、5号遺構の覆土中の様相から、鑄造関連遺物を含む遺構群に先行すると考えられる。また、4号遺構としたいわゆるT字型火葬墓は、県内の事例からでは15世紀を中心とした時期の検出例が多く認められる。その他の鑄造関連遺物を覆土中に含む遺構群は、時期を想定する遺物、遺構の重複が認められない。

鑄造関連遺物を伴う遺構群についてももう少し触れると、これらの遺構は、調査区に偏りなく認められるが、ピット群については、その配置から建物跡として復元できるものが認められず、覆土の様子が一樣であることから、鑄造関連遺物を伴う他の遺構と、同じ時期に含まれること以外の情報は得難いと考えられる。その他の遺構としては、7号、8号、9号遺構が対象となる。7号遺構は小規模な井戸状遺構である。底部近くより加工痕の認められない木と、溶解炉の炉床部破片が出土しており、

投棄された可能性が認められる。8号、9号遺構は、規模の違いはあるものの、平面形態が隅丸方形を呈し、覆土中に焼土粒、炭化物、粘土塊を含むことで共通し、8号遺構に関しては、覆土中層に粘土層が認められるが、鑄造を意味する作業の場との有機的な関連性は見出せない。今のところ、10号遺構も含め、8・9号遺構が、類型化された鑄造遺構の範疇にはあてはまるものではないと言える。

鑄造が行われたと考えられる時期的な問題については、これらの遺構群は時期を示す遺物が皆無であるため直接的に時期を想定できない。よって他遺構との関係から導く事になるが、12世紀後半の時期が与えられる、5号遺構の覆土上層に鑄造関連遺物が認められることから、この時期を鑄造が行われた大まかな上限とするにとどまる。下限については、15世紀頃と考えられる、いわゆるT字型火葬墓の存在がある。しかし、このような墓域が、鑄造を行う場と空間的に共存するとは現時点では考え難く、こうした観点で見ると、この遺構の存在を持って、下限とする事が可能ではある。だが、当調査域自体が、鑄造の場として、どのような性格を持つ場所であるのかという問題が不確定であり、信憑性を持つものではない。

鑄造関連遺物

今回の調査では遺構内外より、総量9000g強の鑄造に関連する遺物が出土した。4節で、遺物の分類毎に遺構との関連性を考えたが、出土状況が散漫であるといえ、出土量が少量である事から、8・9号遺構などが、鑄造遺構であると仮定しても、伴う遺物の組成が、必ずしも遺構の性格を反映しているとは言い切れない。

鑄造関連遺物の分類は、本報告に図示した107点についてが穴沢氏に依るものである。しかし、これ以外の遺物に関しては独自に行っているため、分類上、幾つか気づいた点があるので以下に挙げる。炉壁と分類したも遺物も、胎土の色調・溶解物の気泡や色調などの相違が、溶解炉の使用状況に基づくとすれば、各部位の特徴を残しているものとして、分類可能であると考えられる。また、溶解物に暗赤褐色を示している個体が多く認められ、これが溶解する対象、鉄・銅の影響であるとすれば、今回の分類では不十分といえる。このほか、濃緑色滓、白色滓等の鉍滓や、鉄塊系遺物とした遺物については、肉眼観察によるものである為、分類上、流動的な部分が含まれている事は否めない。いずれにしても、このことは、小鳥向遺跡の鑄造製品を考える上で重要であり、今後、金属学的な分析が必要であると思われる。

鑄物師

鑄物師については、建長4年(1252年)に、現鎌倉市高德院の鑄銅阿弥陀如来像の製作に、畿内に本拠を持つ広階・大中臣・物部・丹治氏が携わったとされ、現存する梵鐘等の仏具から、これ以後、広階・大中臣姓の鑄物師が上総に移ったと考えられている。現長生郡長柄町に所在する眼蔵寺に、弘長4年(1264年)3月の銘文を持つ梵鐘が伝わっており、これが製作年代の明らかな県内最古のものとして知られている。この製作者、広階重永が長柄町刑部・針ヶ谷・金谷一帯を本拠とした鑄物師の祖の一人とされている。同じ刑部郡を本拠とした大中臣兼守が、下総国印東荘六崎大福寺のために、建治4年(1278年)に製作した梵鐘が現存している。市原市内では、養老川中流域、刑部から分水嶺を越えて、西に4km程の矢田の地に、これら刑部の鑄物師からの技術上の伝承関係が指摘されている、国

吉・国久・国安の活動が認められる。この鋳物師が製作した現存する製品は、国吉製作の、明德3年（1392年）銘のある眼蔵寺裏山からの出土とされる梵鐘、国安製作の、応永33年（1426年）銘のある磬、翌応永34年銘のある鰐口が確認されており、長生郡刑部の鋳物師が活動を始めた時期よりも、やや遅れて、その活動の痕跡が認められる。

新堀については、現神奈川県金沢区に所在する金沢文庫所蔵の文書、「上総國新堀郷給主得分注文」に“鋳物師免”の文言がみられ、建武5年（1338年）6月の時点で新堀郷に、鋳物師に対して給免田が与えていたことが伺える。当時新堀郷は、金沢称名寺の所領となっており、称名寺によって、免田を与えられた鋳物師が、この地で、生産活動を行っていた可能性が指摘されている。しかし、この他に、新堀の鋳物師に関する記録、製品は確認されていない。

調査で出土した鋳造関連遺物が、金沢文庫文書に顕れる、免田を与えられた鋳物師とどのように関連するのか、遺物・遺構の検証からでは、これまでのところ推し量る以外には術がないといえる。出土遺物の内容からは、どのような製品を製作していたのか不明であり、銅滓の存在から、鉄製品の他に銅製品製造の可能性を指摘するに留まる。他に、遺構内・外の鋳造関連遺物の出土量が、総体的に少量であることが、操業期間に因るものか、または、製作活動の場が調査区外に展開することに因るのか等、今後の周辺地域の調査成果に譲ることとなった。今回の調査では、当初、鋳造関連の遺跡の調査という認識が無かった。これにより、企画性なく遺物を取り上げることとなり、面的な生産活動としての“場”の性格づけをより困難にする結果となった。しかし、立地条件として、街道や主要河川に近接した場所に鋳造遺跡が認められるといった傾向にも合致し、また、確認調査によって検出された粘土採掘坑の存在もあり、活動の場が近隣に存在する可能性は高い。

<参考文献>

川戸 彰 「上総矢田郷の金工とその作品」『市原市史』1986

赤熊浩一 「金井遺跡B区」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第146集 1994

第4表 出土土器観察表

掲載遺構番号	遺物番号	種別	器種	出土位置	外面の特徴	内面の特徴	遺存度	構成	色調	胎土	口径	器高	底径・(最大径)
2号遺構	①	土師器	壺	周溝覆土上層	口縁部縦方向ヘラミガキ 胴部縦～斜方向ヘラミガキ	口縁部不定方向ヘラミガキ 同斜方向ヘラナデ	3/4以上遺存	良	5YR5/4にぶい赤褐色	赤褐色小粒多様に含む	7.3	19.1	—
2号遺構	②	土師器	短頸壺	周溝覆土上層	口唇部ヨコナデ 胴部縦方向ヘラナデ		1/4以下遺存	良	5YR6/4にぶい橙色	黄褐色極小粒多量に含む	(10.6)	8.0	—
2号遺構	③	土師器	短頸壺	周溝覆土上層	胴部縦～斜方向ヘラナデ		1/4以下遺存	良	5YR6/4にぶい橙色	黄褐色極小粒多量に含む	—	6.1	13.0
2号遺構	④	土師器	杯	周溝覆土上層	口唇部ヨコナデ 体部横方向ヘラケズリ	斜方向ヘラナデか	1/3遺存	良	10YR7/4にぶい黄褐色	赤褐色極小粒少量含む	(11.0)	4.0	—
3号遺構	①	土師器	杯	壁際床直上	ロクロ調整	ロクロ調整	1/3遺存	良	7.5YR5/4にぶい橙色	赤褐色小粒少量含む	(12.8)	3.6	—
3号遺構	②	土師器	杯	覆土上層	ロクロ調整 体部下端斜方向ヘラケズリ	ロクロ調整	1/3遺存	良	7.5YR6/4にぶい橙色	茶褐色・白色極小粒少量含む	(13.8)	5.0	—
3号遺構	③	土師器	杯	カマド内	ロクロ調整 体部下端斜方向ヘラケズリ	ロクロ調整	1/4遺存	良	2.5YR6/6橙色	白色極小粒少量	(7.0)	(2.0)	—
3号遺構	④	須恵器	長頸瓶	覆土上層	ロクロ調整 自然釉が付着	ロクロ調整	1/4以下遺存	良	5Y6/1灰色	黒色極小粒微量含む	(10.0)	4.7	—
3号遺構	⑤	須恵器	長頸瓶	覆土上層			1/4以下遺存	良	5Y6/1灰色	黒色極小粒微量含む	—	2.7	(8.0)
3号遺構	⑥	土師器	甕	覆土中	口縁部ヨコナデ 胴部縦方向ヘラケズリ	斜方向ヘラナデか	1/4以下遺存	良	10YR6/4にぶい黄褐色	白色・灰色小粒少量含む	(18.8)	6.6	—
3号遺構	⑦	須恵器	甕	5号遺構覆土上層	口縁部ヨコナデ 胴部叩き後斜方向ヘラナデ	不整楕円形無文あて具痕	1/4以下遺存	良	10Y5/1灰色	白色・橙色極小粒多く含む	(22.0)	15.9	—
3号遺構	⑧		支脚か	カマド脇	ヘラ状工具によるナデか			良	5YR7/4にぶい橙色	赤褐色小粒少量含む	—	—	11.5
5号遺構	①	カワラケ		覆土下層	ロクロ調整 底部回転糸切り無調整	ロクロ調整	1/4遺存	良	7.5YR7/4にぶい橙色	灰色極小粒多く含む	(8.4)	1.75	—
5号遺構	②	常滑	甕	覆土下層			1/4以下遺存	良	7.5YR5/1褐灰色	白色・半透明極小粒多く含む	(13.8)	3.9	—
6号遺構	①	瀬戸美濃	四耳壺	覆土中			1/4以下遺存	良	5Y7/2 灰白色	灰白色極小粒多く含む	—	2.3	—
6号遺構	②	土師器	甌	覆土中			1/4以下遺存	良	7.5YR6/6橙色	黄褐色極小粒多く含む	—	—	—
Pit. 24	①	土師器	高杯	覆土上層	縦方向ヘラケズリ	縦方向ナデか	1/4遺存	良	7.5YR6/6橙色	黄褐色極小粒多く含む	—	7.6	—

第5表 鋳造関連遺物観察表

遺物番号	遺構番号	旧遺構番号	種別	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁着度	メタル度	色調	特記事項
1	2号遺構	003	炉壁	4.6	2.9	2.0	24.6	2.0		灰色	溶着物に気泡が密に認められる
2	2号遺構	003	炉壁	4.4	2.5	3.1	28.0	2.0		灰色	溶着物に気泡が密に認められる
3	2号遺構	003	炉壁	5.7	4.0	2.2	47.1	3.0		灰色	胎土にスサ痕認められる
4	7号遺構	004	炉壁	5.0	3.2	2.5	32.0	3.0		灰色	胎土にスサ痕認められる
5	7号遺構	004	炉壁	11.3	7.7	4.8	375.0	2.0		灰色	木炭・鉄塊遺存
6	8号遺構	006	炉壁	3.2	2.1	2.1	13.9	1.0		灰色	赤色部位有り
7	8号遺構	006	炉壁	5.0	3.9	3.9	51.0	2.0		灰色	赤色部位有り
8	Pit. 17	Pit. 17	炉壁	4.1	2.9	2.3	24.5	2.0		灰色	赤色部位有り
9	Pit. 41	Pit. 41	炉壁	3.6	2.3	1.8	15.6	2.0		灰色	赤色部位有り
10	7号遺構	004	炉壁(炉底)	7.0	5.5	4.8	141.5	2.0		灰色	溶着物に気泡が密に認められる
11	7号遺構	004	炉壁(炉底)	10.5	9.1	4.5	460.0	3.0		灰色	溶着物に気泡が密に認められる
12		IV層一括	炉壁	7.8	7.8	4.2	170.8	3.0		灰色	赤色部位有り
13		IV層一括	炉壁	10.3	5.4	4.0	129.9	4.0		灰色	赤色部位有り
14	8号遺構	006	炉壁(炉底)	4.7	4.1	3.1	50.1	3.0	△	灰色	溶着物に気泡が密に認められる
15	Pit. 19	Pit. 19	炉壁	4.1	2.0	2.2	14.0	4.0	△	灰色	鉄塊遺存
16	Pit. 42	Pit. 42	炉壁	3.6	3.0	1.5	15.9	5.0	△	灰色	鉄塊遺存
17		IV層一括	炉壁(炉底)	7.9	6.6	3.8	209.9	4.0	L(●)	灰色	鉄塊遺存
18	8号遺構	006	炉壁	4.6	3.9	1.7	23.8	2.0		灰色	
19	8号遺構	006	炉壁	6.4	5.9	4.0	97.7	3.0		灰色	赤色部位有り
20	4号遺構	014	炉壁	4.0	4.0	2.5	26.3	3.0		灰色	赤色部位有り
21	Pit. 3	Pit. 3	炉壁	4.8	3.0	3.1	31.2	2.0		灰色	赤色部位有り
22	Pit. 13	Pit. 13	炉壁	3.9	3.1	3.0	26.8	1.0		灰色	赤色部位有り
23	Pit. 17	Pit. 17	炉壁	4.7	4.2	2.1	30.0	2.0		灰色	赤色部位有り
24	Pit. 20	Pit. 20	炉壁	5.4	3.8	2.6	25.4	2.0		灰色	赤色部位有り
25	Pit. 39	Pit. 39	炉壁	4.7	4.4	3.0	42.7	3.0		灰色	赤色部位有り
26	6号遺構	002	羽口	2.4	2.4	1.4	7.0	3.0		赤褐色	
27	2号遺構	003	羽口	4.8	3.6	1.2	15.8	3.0		赤褐色	
28	7号遺構	004	羽口	3.0	2.4	1.7	8.6	1.0		赤褐色	
29	7号遺構	004	羽口	5.0	4.5	3.4	40.4	2.0		赤褐色	内側に赤色部位、糊痕明瞭
30	9号遺構	005	羽口	3.7	3.1	1.0	9.8	1.0		赤褐色	
31	1号遺構	007	羽口	5.1	3.5	1.4	25.1	4.0		赤褐色	
32	Pit. 17	Pit. 17	羽口	4.3	3.7	1.8	22.4	3.0		赤褐色	
33	Pit. 37	Pit. 37	羽口	3.6	2.6	1.1	8.8	3.0		赤褐色	

遺物番号	遺構番号	旧遺構番号	種別	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁着度	メタル度	色調	特記事項
34	8号遺構	006	羽口	6.7	4.6	2.8	61.7	3.0		赤褐色	
35	Pit. 26	Pit. 26	羽口	5.3	3.8	1.6	19.8	5.0		赤褐色	
36	Pit. 39	Pit. 39	羽口	4.8	4.7	1.7	26.9	3.0		赤褐色	
37	Pit. 39	Pit. 39	羽口	7.1	4.8	2.4	48.0	4.0		赤褐色	
38	7号遺構	004	濃緑色滓	4.4	3.8	2.7	34.7	1.0		濃緑色	木炭遺存
39	9号遺構	005	濃緑色滓	2.3	2.2	1.7	7.0	1.0		濃緑色	
40	Pit. 17	Pit. 17	濃緑色滓	4.1	3.3	1.9	17.2	1.0		濃緑色	
41	Pit. 26	Pit. 26	濃緑色滓	3.0	2.0	1.2	4.9	2.0		濃緑色	
42	2号遺構	003	銅滓	4.1	2.3	2.4	11.3	3.0		灰色	緑青付、銅小片含む
43	3号遺構	001	白色滓	3.0	2.2	1.5	7.5	1.0		白色	
44	6号遺構	002	白色滓	3.0	2.6	3.1	20.0	1.0		白色	
45	2号遺構	003	白色滓	3.4	2.8	2.0	15.6	2.0		白色	
46	2号遺構	003	白色滓	3.5	2.6	3.0	16.9	2.0		白色	
47	9号遺構	005	白色滓	3.8	3.1	1.4	13.2	2.0		白色	
48	8号遺構	006	白色滓	3.8	2.1	1.3	5.4	1.0		白色	
49	8号遺構	006	白色滓	3.1	2.7	2.4	16.6	3.0		白色	
50	Pit. 17	Pit. 17	白色滓	3.0	2.6	2.4	11.7	2.0	△	白色	鉄塊含む
51	Pit. 21	Pit. 21	白色滓	4.7	2.5	1.8	13.4	2.0		白色	
52	Pit. 23	Pit. 23	白色滓	3.3	2.3	1.7	11.6	2.0		白色	
53	Pit. 25	Pit. 25	白色滓	4.1	2.7	1.9	14.6	2.0		白色	
54	Pit. 25	Pit. 25	白色滓	4.5	2.9	1.8	16.7	4.0		白色	
55	Pit. 26	Pit. 26	白色滓	5.2	2.1	1.8	12.3	1.0		白色	
56	Pit. 26	Pit. 26	白色滓	3.9	3.2	2.2	17.5	2.0		白色	
57	Pit. 42	Pit. 42	白色滓	4.5	2.7	1.6	15.2	3.0		白色	
58	3号遺構	001	鑄型	2.8	2.3	1.3	6.9	2.0		赤褐色	外型？
59	9号遺構	005	鑄型	2.7	1.8	2.3	8.3	1.0		赤褐色	外型？
60	Pit. 39	Pit. 39	鑄型	3.2	2.0	3.7	13.5	3.0		赤褐色	外型？
61	5号遺構	011	鑄型	6.5	4.4	3.8	65.4	3.0		赤褐色	中子 復元径26.8~37.6
62	Pit. 17	Pit. 17	鑄型	2.3	1.9	1.3	4.0	1.0		赤褐色	中子？
63	3号遺構	001	被熱石	3.6	2.1	2.2	11.0	3.0		黄橙色	
64	Pit. 26	Pit. 26	鉄塊系遺物	2.6	1.9	1.6	10.6	5.0	L (●)		
65	Pit. 36	Pit. 36	鉄塊系遺物	3.6	1.9	1.4	12.6	5.0	L (●)		
66	Pit. 41	Pit. 41	鉄塊系遺物	2.4	2.4	1.1	9.7	5.0	L (●)		
67	Pit. 41	Pit. 41	鉄塊系遺物	2.8	2.1	1.8	16.0	6.0	L (●)		
68	3号遺構	001	鉄塊系遺物	1.6	1.1	1.2	3.8	4.0	M (◎)		
69	3号遺構	001	鉄塊系遺物	2.2	1.8	1.2	6.0	5.0	◎		
70	3号遺構	001	鉄塊系遺物	2.8	1.6	1.7	10.8	5.0	M (◎)		
71	2号遺構	003	鉄塊系遺物	1.7	1.4	1.1	4.6	4.0	M (◎)		
72	9号遺構	005	鉄塊系遺物	2.0	1.6	1.6	6.0	5.0	M (◎)		
73	8号遺構	006	鉄塊系遺物	2.0	2.0	1.0	6.8	5.0	M (◎)		
74	8号遺構	006	鉄塊系遺物	2.9	2.5	2.0	18.6	5.0	M (◎)		
75	5号遺構	011	鉄塊系遺物	4.1	2.8	1.7	16.8	5.0	△		
76	Pit. 20	Pit. 20	鉄塊系遺物	1.6	1.6	1.2	4.2	5.0	M (◎)		
77	Pit. 21	Pit. 21	鉄塊系遺物	1.6	1.2	0.8	3.1	4.0	M (◎)		
78	Pit. 37	Pit. 37	鉄塊系遺物	2.3	1.5	1.3	7.0	5.0	M (◎)		
79	Pit. 42	Pit. 42	鉄塊系遺物	2.4	2.0	1.2	7.0	5.0	M (◎)		
80	Pit. 47	Pit. 47	鉄塊系遺物	2.1	1.7	1.8	9.5	5.0	M (◎)		
81	3号遺構	001	鉄塊系遺物	2.0	1.6	1.3	6.0	4.0	H (○)		
82	2号遺構	003	鉄塊系遺物	1.7	1.4	1.4	5.1	4.0	H (○)		
83	8号遺構	006	鉄塊系遺物	2.4	1.7	1.4	6.1	4.0	H (○)		
84	8号遺構	006	鉄塊系遺物	4.0	2.7	2.1	19.7	5.0	H (○)		
85	Pit. 26	Pit. 26	鉄塊系遺物	1.8	1.3	1.2	4.5	4.0	H (○)		
86	Pit. 36	Pit. 36	鉄塊系遺物	1.7	1.5	1.3	3.8	5.0	H (○)		
87	3号遺構	001	鉄製品	2.2	1.2	0.7	3.5	4.0	M (◎)		鑄造品、板状
88	2号遺構	003	鉄製品	2.1	1.7	1.3	7.1	5.0	△		鑄造品、板状
89	9号遺構	005	鉄製品	2.4	1.5	1.0	3.2	4.0	△		鑄造品、板状
90	9号遺構	005	鉄製品	2.3	1.7	1.0	3.9	4.0	△		鑄造品、板状
91	8号遺構	006	鉄製品	4.7	3.8	1.4	17.7	6.0	△		鑄造品、板状
92	8号遺構	006	鉄製品	4.2	2.2	1.3	14.0	5.0	△		鑄造品、板状
93	Pit. 20	Pit. 20	鉄製品	2.9	2.4	0.9	8.3	4.0	△		鑄造品、板状
94	Pit. 37	Pit. 37	鉄製品	3.9	1.6	0.9	9.1	5.0	H (○)		鑄造品、板状
95	3号遺構	001	鉄製品	3.0	0.9	0.7	2.2	4.0	△		鍛造品、釘？
96	6号遺構	002	鉄製品	3.0	0.9	0.8	2.6	6.0	H (○)		鍛造品、棒状
97	Pit. 20	Pit. 20	鉄製品	3.0	1.2	0.7	2.3	4.0	△		鍛造品、刀子茎？
98	8号遺構	006	鉄製品	4.1	1.1	1.4	4.6	5.0	△		鍛造品、刀子茎？
99	3号遺構	001	黒鉛化木炭	3.6	2.1	1.3	12.0	4.0	H (○)		
100	9号遺構	005	黒鉛化木炭	1.7	1.0	0.4	0.5	2.0			
101	9号遺構	005	黒鉛化木炭	2.5	1.1	0.7	2.2	4.0	△		
102	Pit. 20	Pit. 20	黒鉛化木炭	4.2	1.4	0.7	3.4	3.0	M (◎)		
103	Pit. 21	Pit. 21	黒鉛化木炭	1.9	1.0	0.5	0.9	3.0			
104	Pit. 21	Pit. 21	黒鉛化木炭	1.8	0.9	1.2	1.3	2.0			
105	Pit. 21	Pit. 21	黒鉛化木炭	2.2	1.3	1.2	2.1	2.0			
106	Pit. 41	Pit. 41	黒鉛化木炭	3.6	1.1	0.7	2.3	4.0			
107		全体一括	黒鉛化木炭	1.9	1.6	0.9	3.0	3.0			

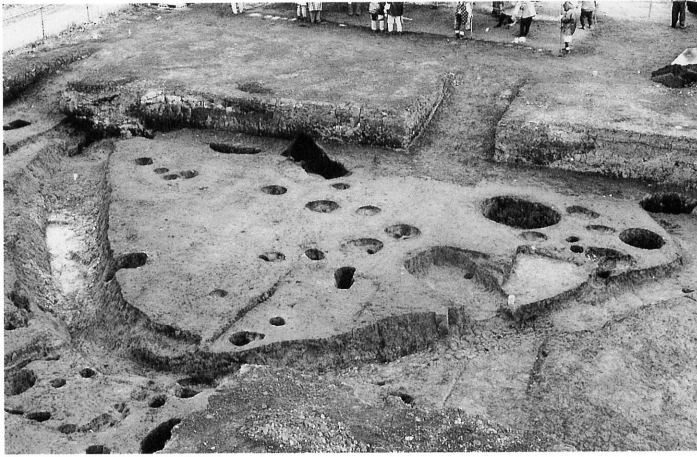
写真図版



調査区南側 (東側から)



調査区北側 (東側から)



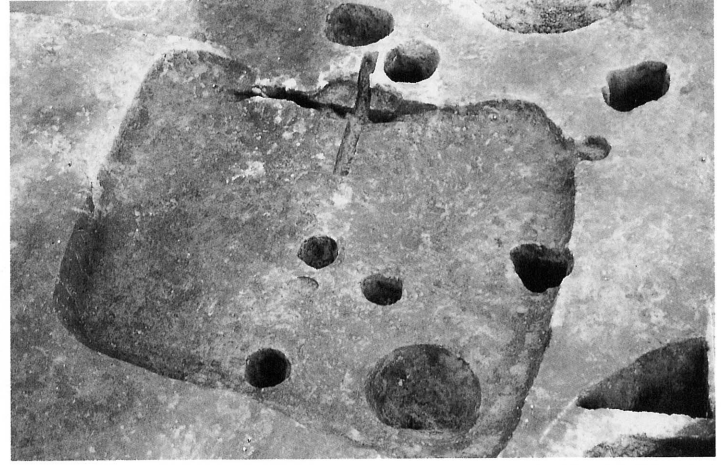
2号遺構 (東側から)



1号(右)・2号(左)遺構 (西側から)



3号遺構 (南側から)



3号遺構 (南側から)



4号遺構 (東側から)



4号遺構 (北東側から)



4号遺構 (北側から)



4号遺構 (西側から)



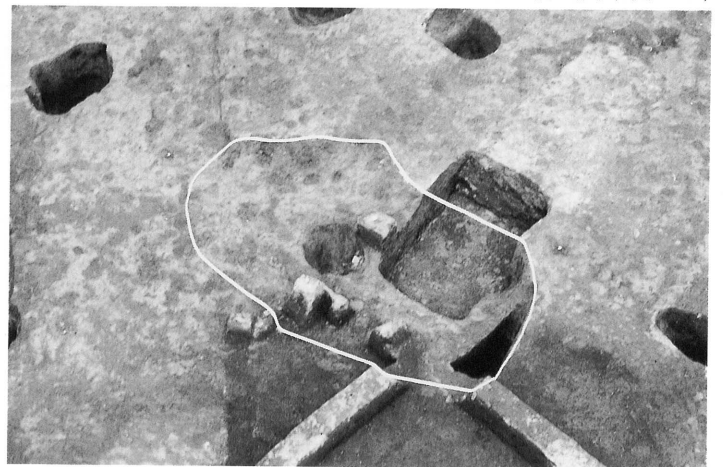
4号遺構 (北側から)



5号遺構 (南東側から)



5号遺構 (南側から)



6号遺構 (南側から)



7号遺構 (南側から)



7号遺構 (西側から)



13号遺構 (西側から)



8号遺構 (南側から)



9号遺構 (南側から)



10号遺構 (南側から)



10号遺構 (東側から)



11号遺構 (東側から)



Pit.24 (南側から)



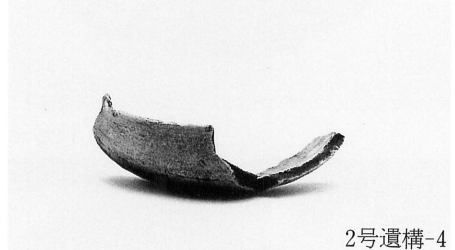
調査状況 (西側から)



2号遺構-1



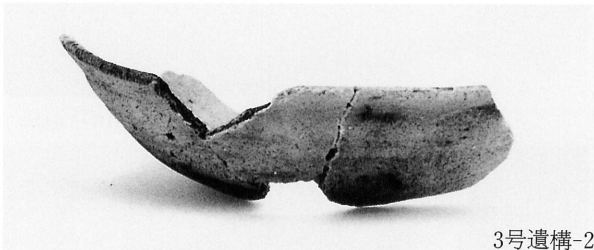
2号遺構-3



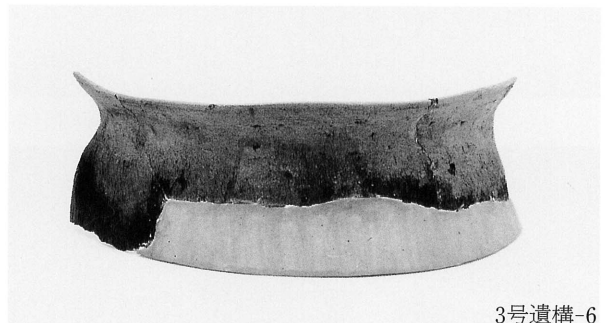
2号遺構-4



3号遺構-1



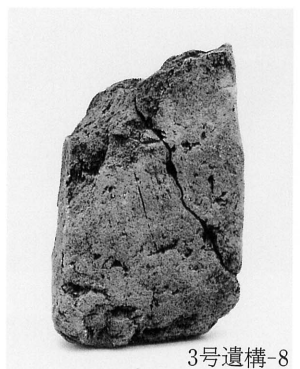
3号遺構-2



3号遺構-6



3号遺構-2



3号遺構-8



Pit24-1



3号遺構-7

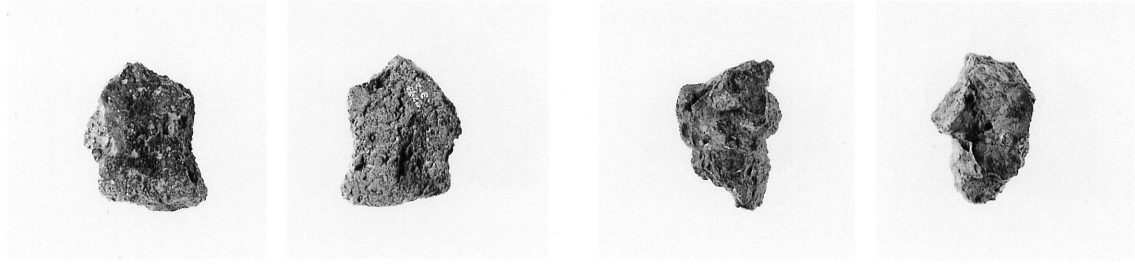


9号遺構-1



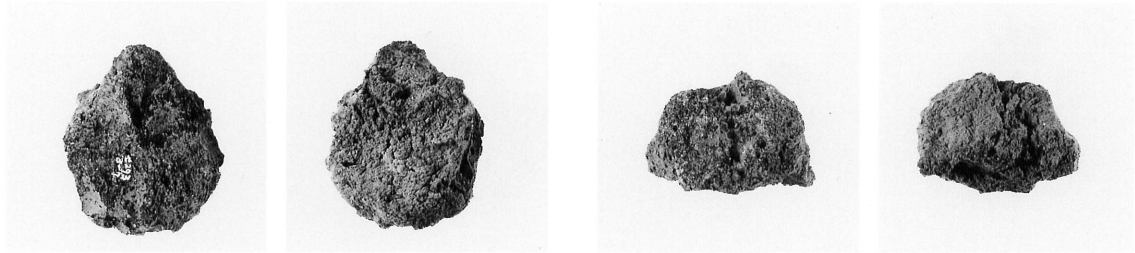
鑄型胎土

炉壁



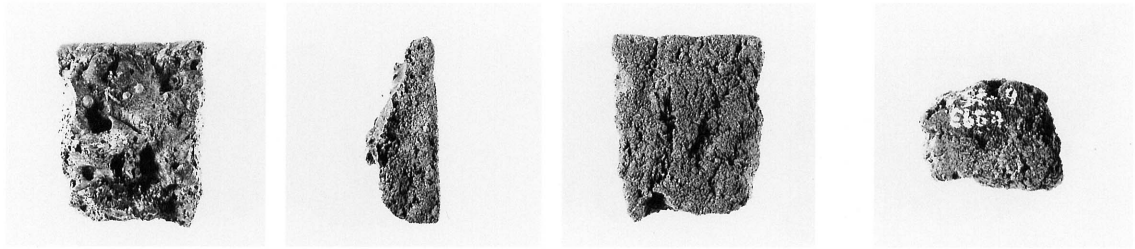
1

2



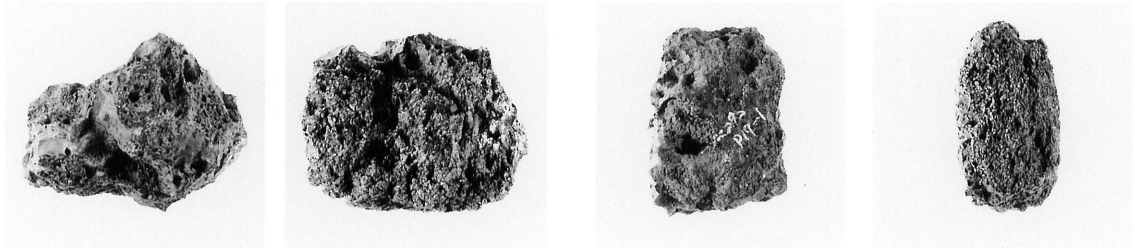
3

4



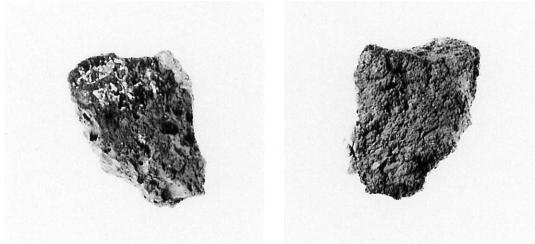
5

6



7

8



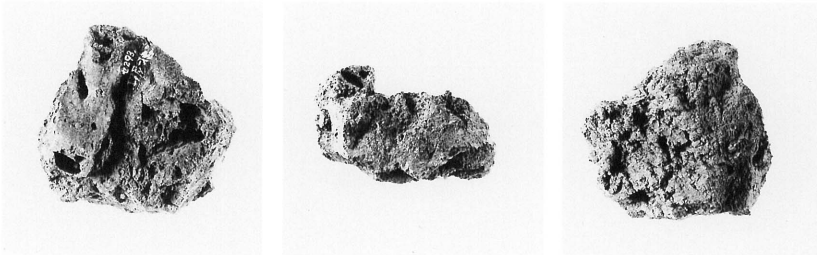
9



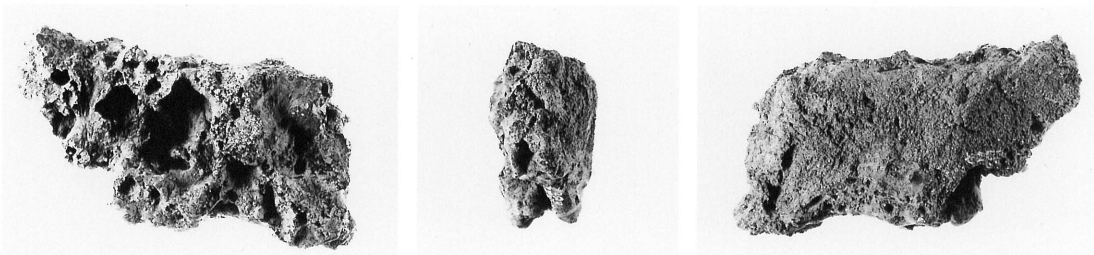
10



11



12

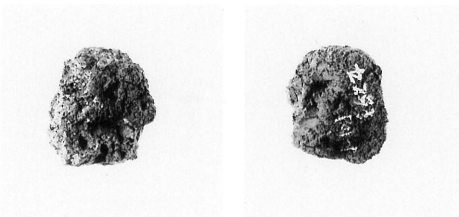


13

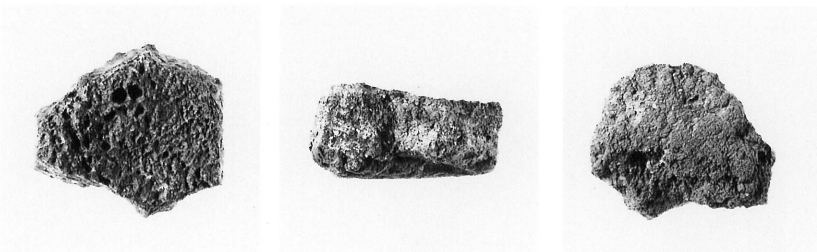


15

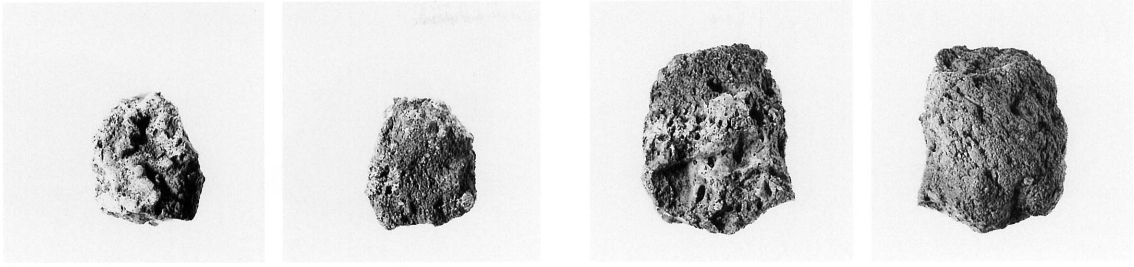
14



16

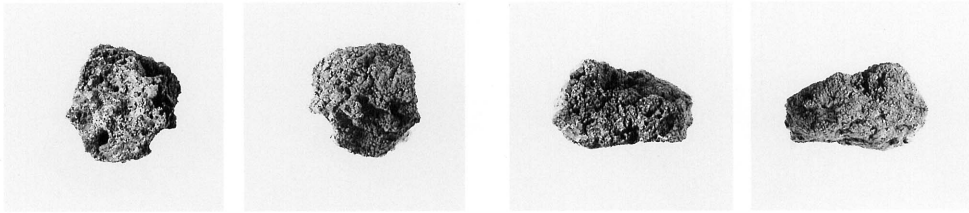


17



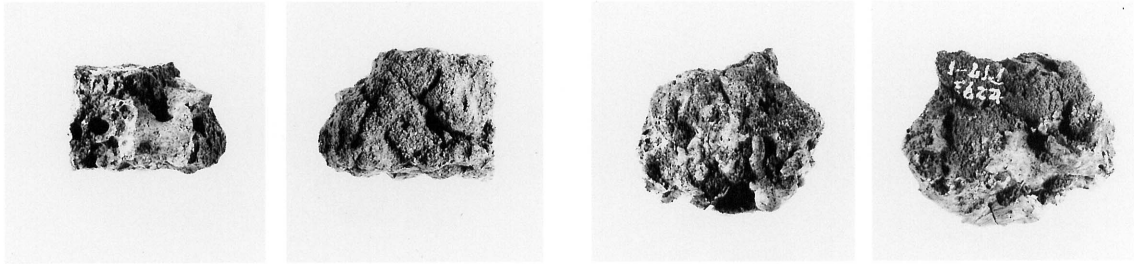
18

19



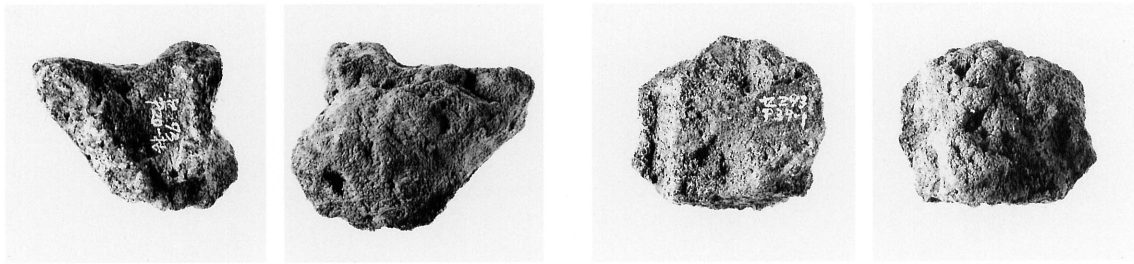
20

21



22

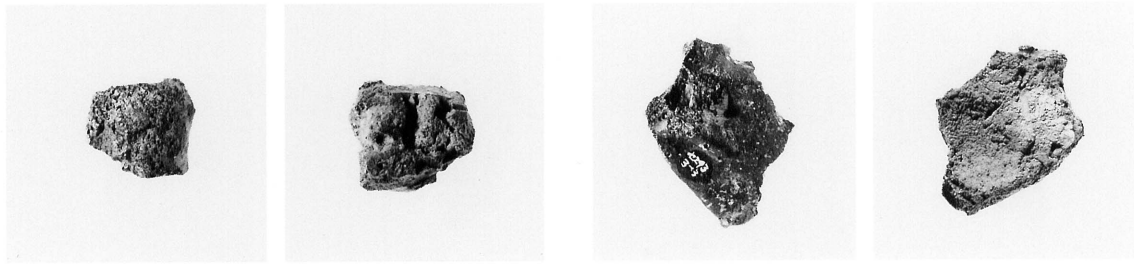
23



24

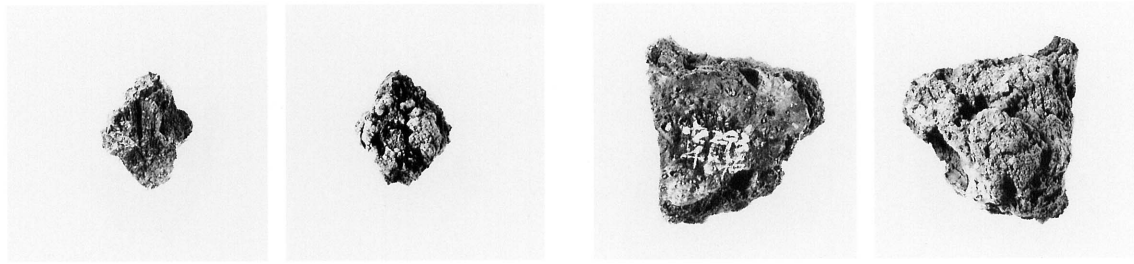
25

羽口



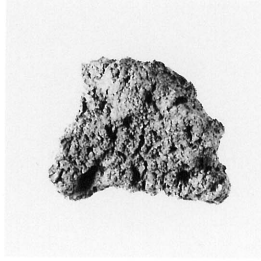
26

27

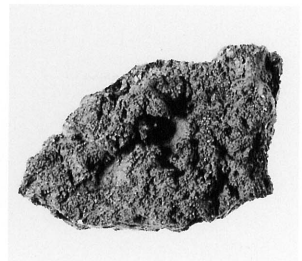
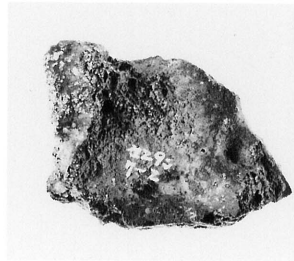


28

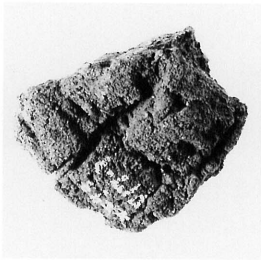
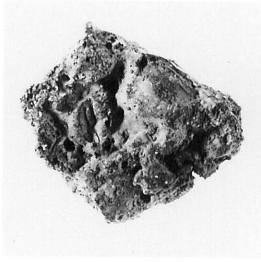
29



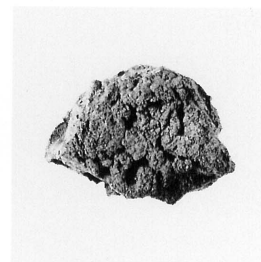
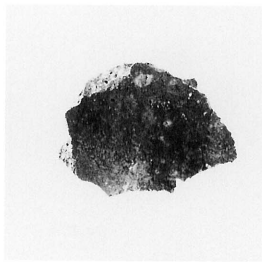
30



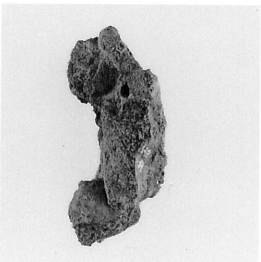
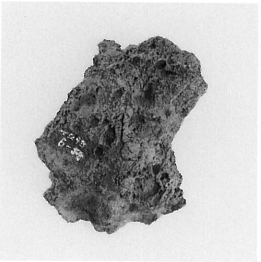
31



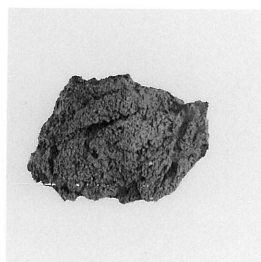
32



33



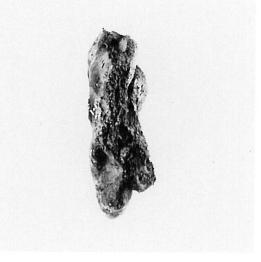
34



35

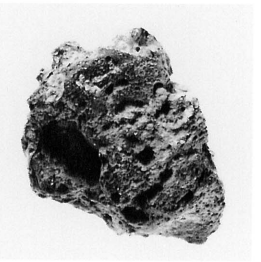
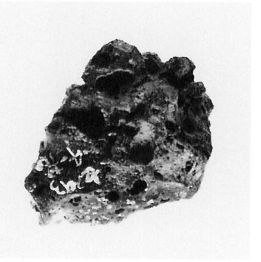


36

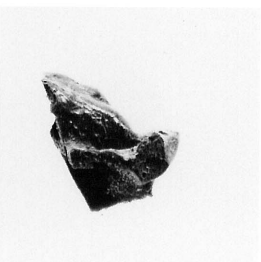
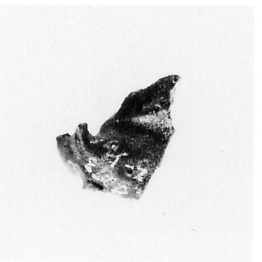


37

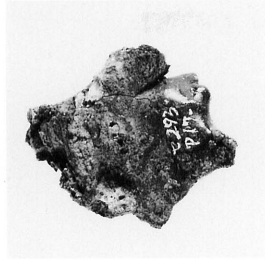
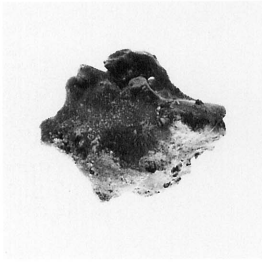
濃綠色滓



38



39



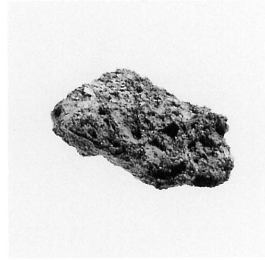
40



41

銅滓

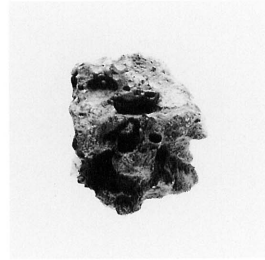
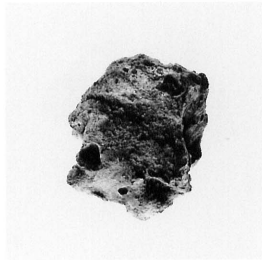
白色滓



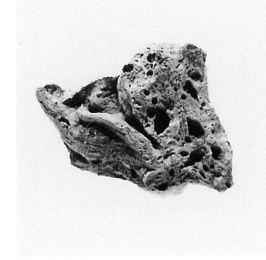
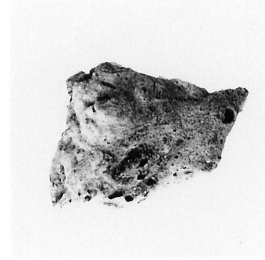
42



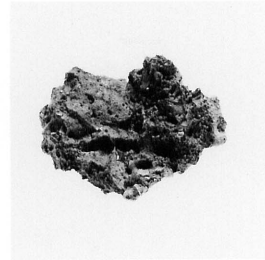
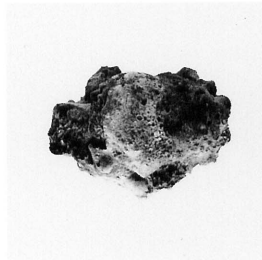
43



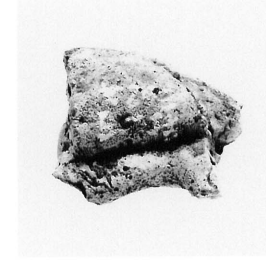
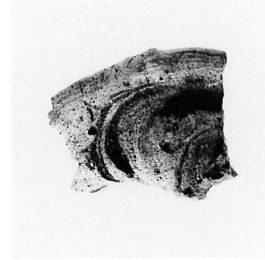
44



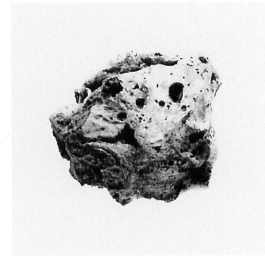
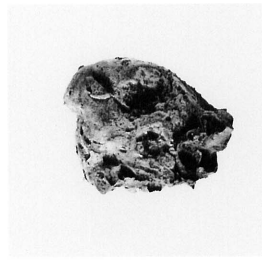
45



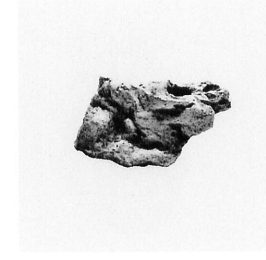
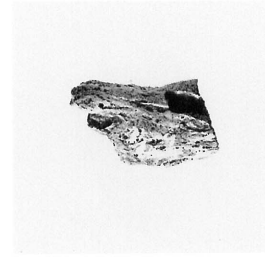
46



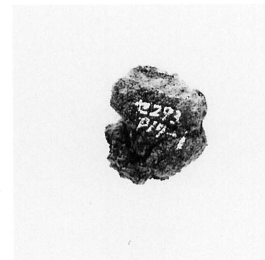
47



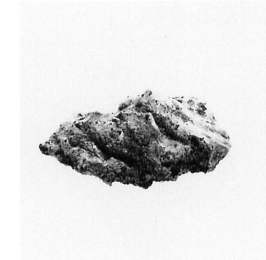
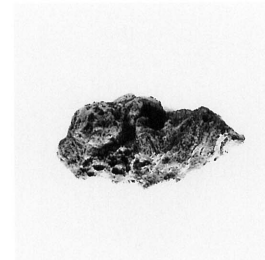
48



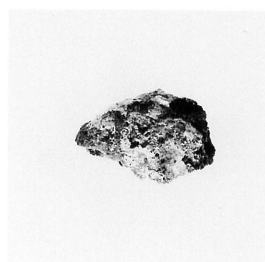
49



50

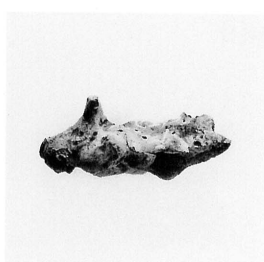
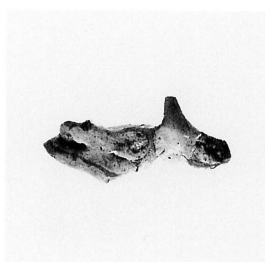
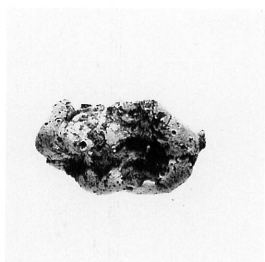


51



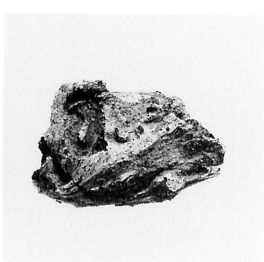
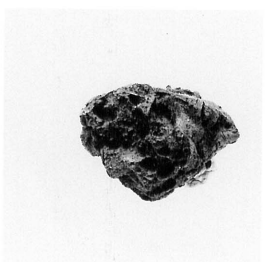
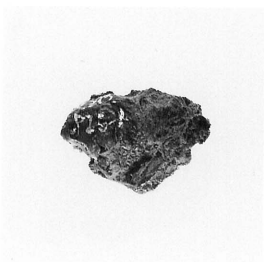
52

53



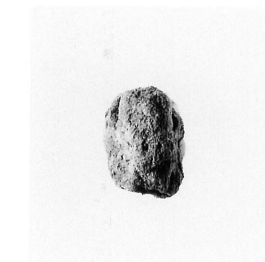
54

55



56

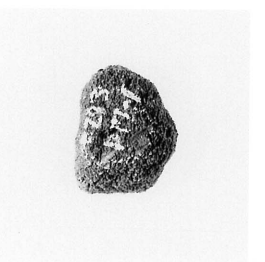
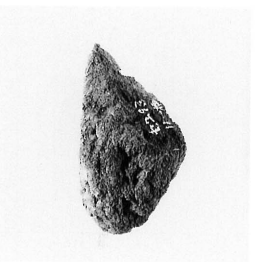
57



58

59

60 被熱石

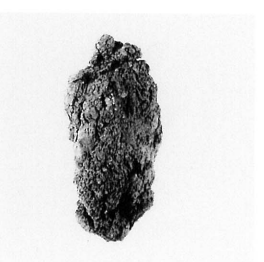
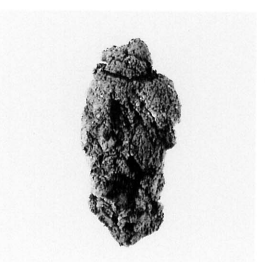
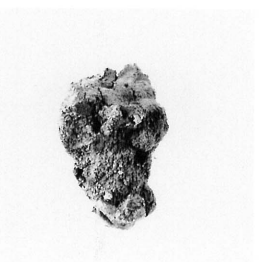
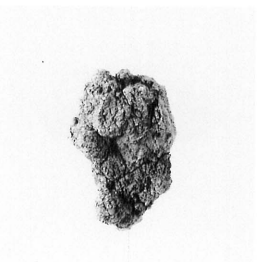


61

62

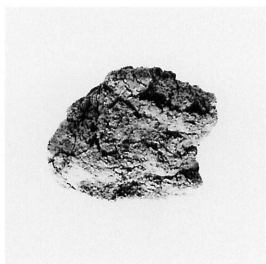
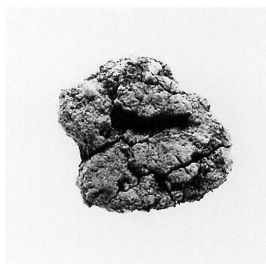
63

鉄塊系遺物

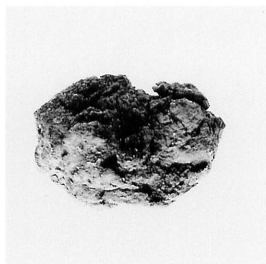
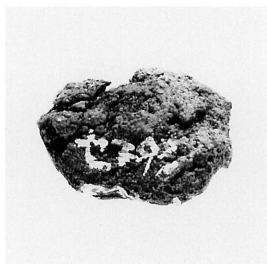


64

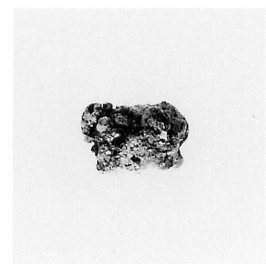
65



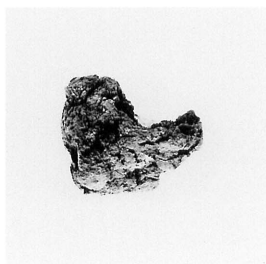
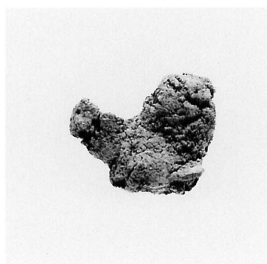
66



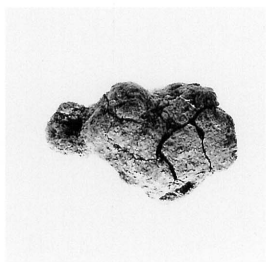
67



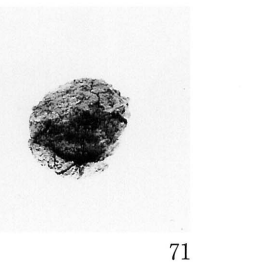
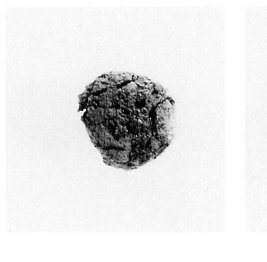
68



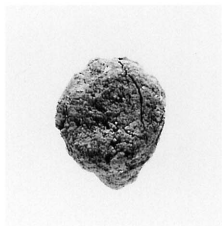
69



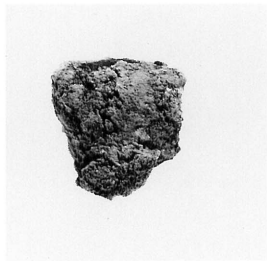
70



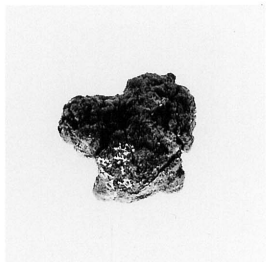
71



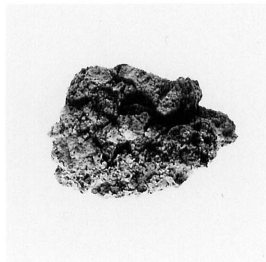
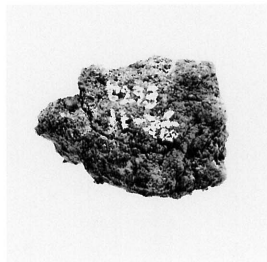
72



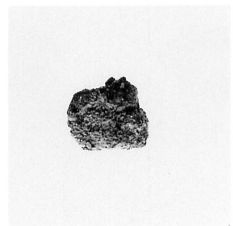
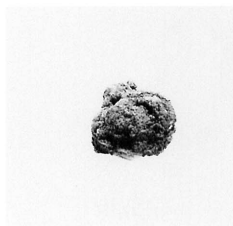
73



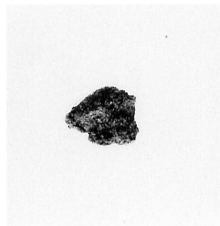
74



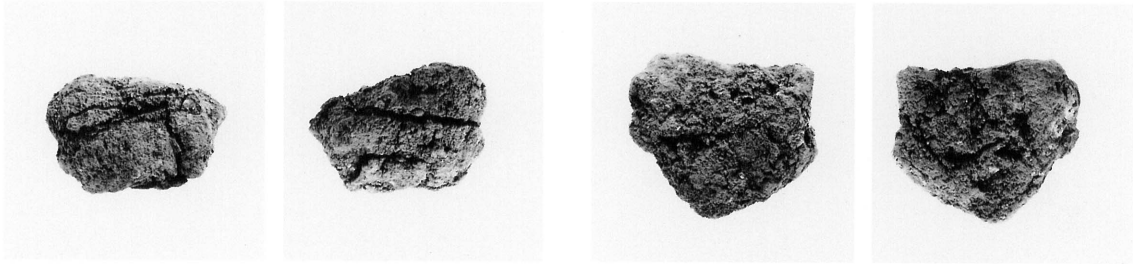
75



76

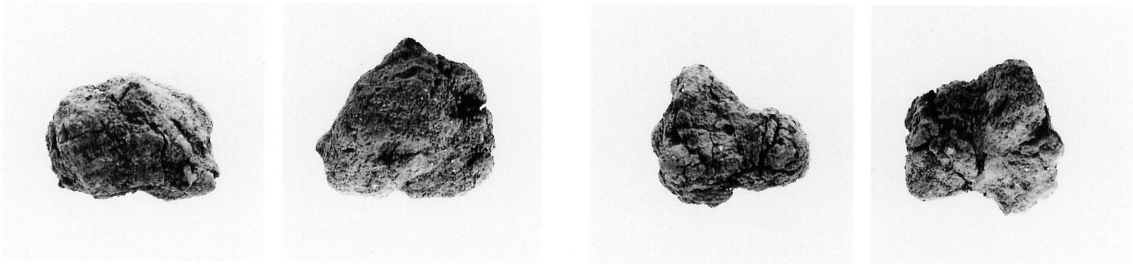


77



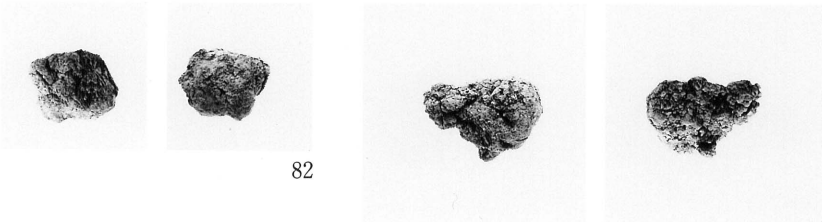
78

79



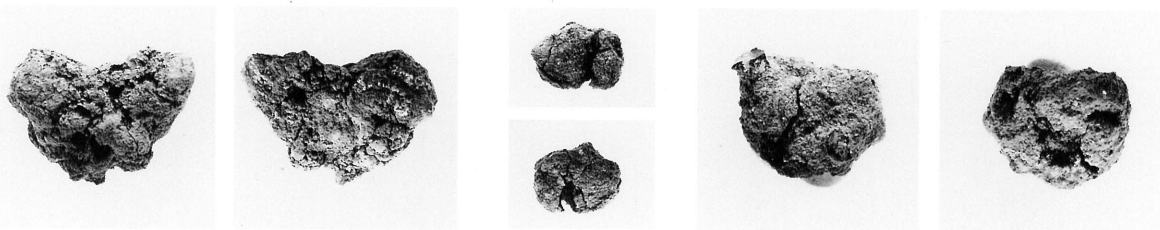
80

81



82

83

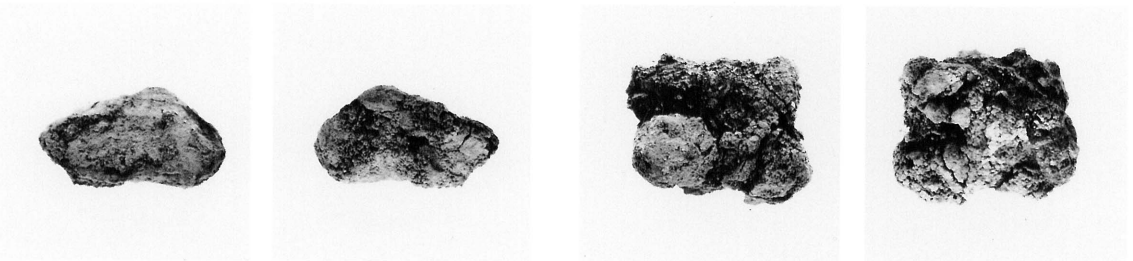


84

85

86

製品



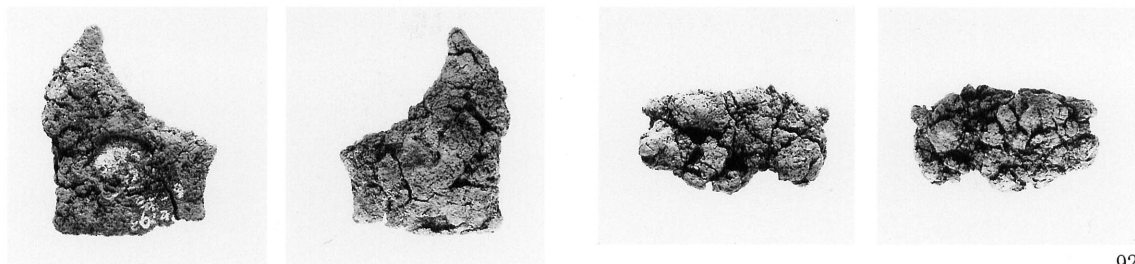
87

88



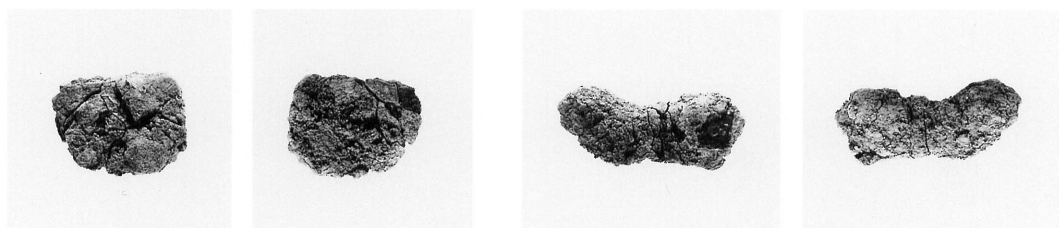
89

90



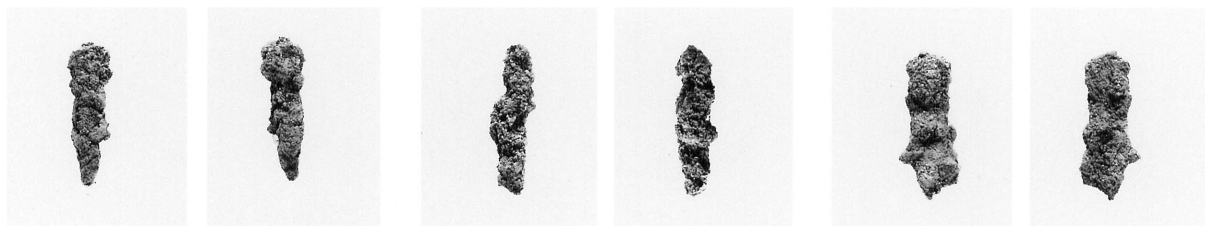
91

92



93

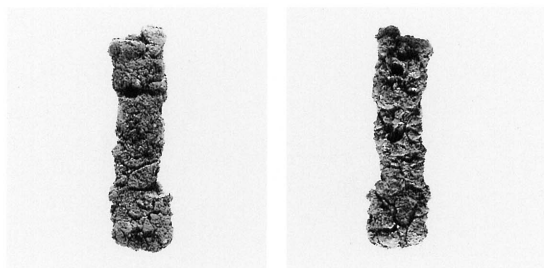
94



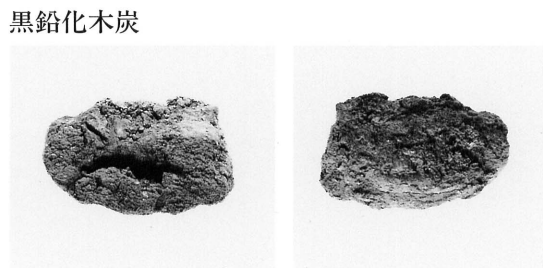
95

96

97

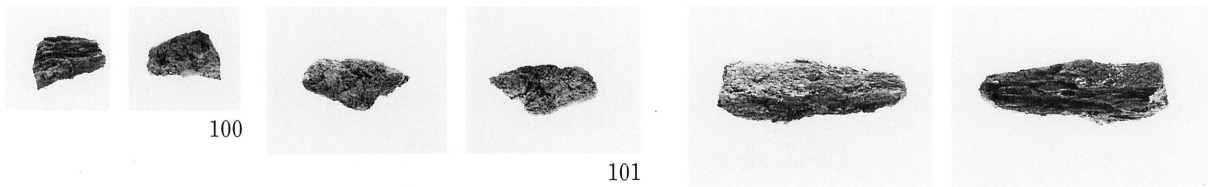


98



黒鉛化木炭

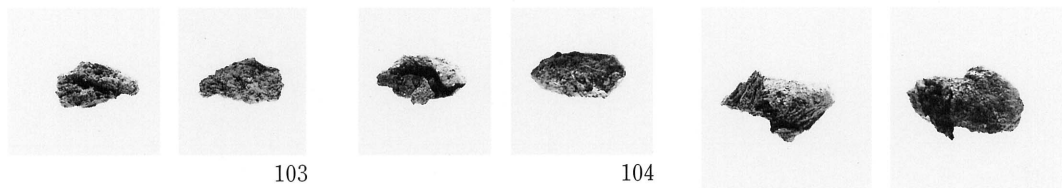
99



100

101

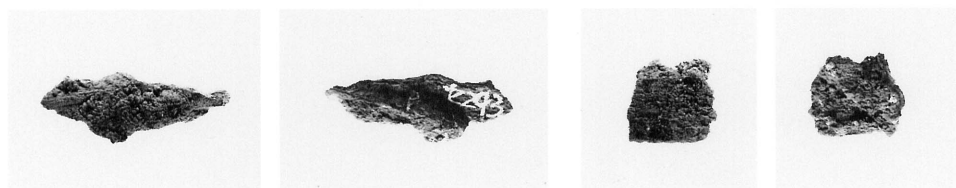
102



103

104

105



106

107

報 告 書 抄 録

ふりがな	いちほらしことりむかいせき							
書名	市原市小鳥向遺跡							
副書名								
差次								
シリーズ名	財団法人 市原市文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第69集							
編集者名	北見一弘							
編集機関	財団法人 市原市文化財センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436 (41) 7300							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ことりむかい 小鳥向遺跡	ちほけんいちほらし 千葉県市原市新堀 字馬場947-3の 一部	12219	セ293	35° 27' 50"	140° 8' 25"	19990510) 19990524	230㎡	社会福祉 施設建設 に伴う埋 蔵文化財 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小鳥向遺跡	古墳	古墳時代前期	方形周溝墓	土師器		河岸段丘面における、 古墳時代前期の墓域 の存在、平安時代の 集落の存在、近隣で の中世の鑄造を想定 しうる遺物の存在が 確認できた。		
	集落	平安時代	竪穴式住居 火葬施設	土師器、須恵器、支 脚、人骨				
		中世	土坑	鑄造関連遺物（鑄型、 炉壁、羽口、鉄塊、 鉄滓）				

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第69集
市原市小鳥向遺跡

2000年3月21日 印刷
2000年3月29日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 医療法人 白百合会

財団法人 市原市文化財センター
千葉県市原市能満1,489番地
TEL 0436 (41) 7300

印刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町2-5-5